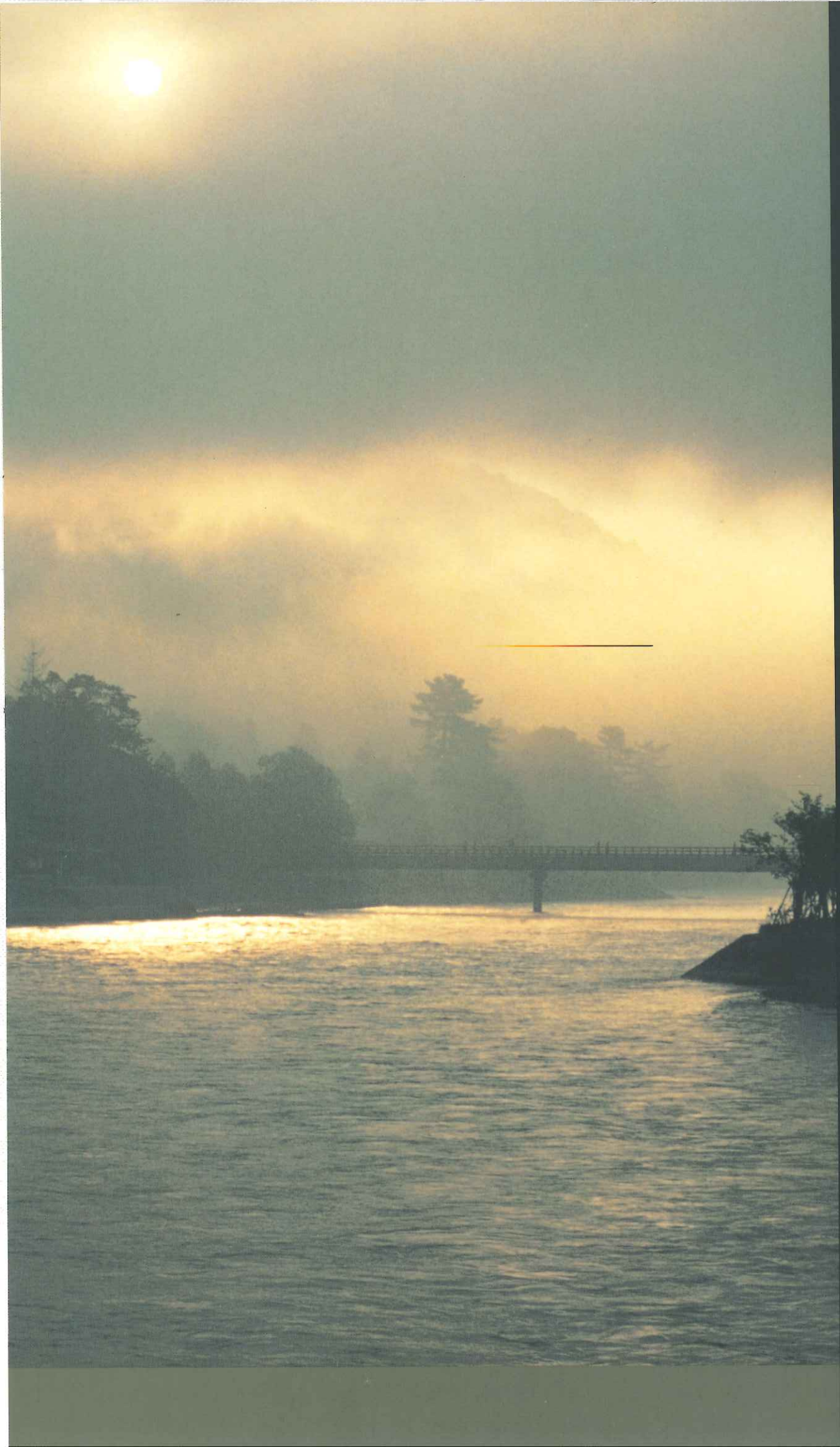


宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第四三集

白川金色院跡・平等院旧境内遺跡

一九九九年三月　宇治市教育委員会

巻頭写真①（白川金色院跡）

第３調査区全景（礎石建物 SB01・02，南から）

巻頭写真②（平等院旧境内遺跡）

庭園遺構全景（東から）

序

宇治市教育委員会では、文化庁から国宝重要文化財保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に所在する重要な遺跡や緊急に調査・保護を必要とする遺跡について、昭和62年度より計画的に発掘調査を実施しています。今年度は継続調査である白川金色院跡と開発に伴う平等院旧境内遺跡の計２件の調査を実施しました。

今年度の白川金色院跡の発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての礎石建物や掘立柱建物等を検出しました。特に金色院の南側に広がる棚田上に平安期の遺構が発見されたことは重要な発見でした。平安期金色院の寺域は文殊堂一帯に集中して展開していたという想定をしてきたのですが、今回の調査によって南側丘陵上にも平安期の建物が存在していたことが明らかとなり、これまで考えてきた平安期金色院のイメージを考え直す必要性がでてきました。

平等院旧境内遺跡は、昨年度に検出した平安時代の庭園跡の詳細調査で、調査の結果園池ではなく「遣水」ともいうべき流れを演出した庭であり、宇治の自然と一体となった庭作りが行われていたことが明らかとなりました。文献によれば、当地付近に「南泉房」と呼ばれた房があり、宇治大納言と呼ばれた源隆国がそこで『宇治拾遺物語』の原典とされる『宇治大納言物語』を執筆したといいます。今回見つかった庭園は、出土遺物の年代からも源隆国が在住した南泉房庭園の可能性が考えられ、宇治の歴史解明だけではなく古典文学の世界を紐解く上でも興味深い発見となりました。

本書はこの２件の発掘調査成果を一冊にまとめたものです。本書が多くの方々の目に触れ、広く宇治の歴史を知る上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御理解と御協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたり御指導ならびに御助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成11年３月

宇治市教育委員会

教育長　谷　口　道　夫

例　　言

1．本書は、平成10年度宇治市内遺跡発掘調査事業の成果概要である。

2．本書が収録する遺跡は下記の２遺跡である。

遺　跡　名	種類	主な時代	所　在　地	調 査 期 間
平等院旧境内遺跡	寺跡	平安時代	宇治塔川	10年８月～10年11月
白 川 金 色 院 跡	寺跡	平安時代 室町時代	白川姿婆山・宮の前 宮の後・植田	10年11月～11年３月

3．本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第43集にあたる。

4．本事業の経費は10,000,000円で、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその 1/2 を、京都府から文化財緊急保存費補助金としてその 1/4 の交付を受けた。

5．本発掘調査事業に関する期間・体制は下記のとおりである。

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教 育 長	谷　口　道　夫
発掘担当者	同	歴史資料館文化財保護係	浜　中　邦　弘
発掘事務局	同	参事兼歴史資料館館長	源　城　政　好
	同	歴史資料館主幹	吉　水　利　明
	同	歴史資料館館長補佐	岡　井　毅　芳
調 査 指 導	京都府教育庁文化財保護課 ㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター 京都府立山城郷土資料館		
調査参加者	中井淳史、荒木浩一、宮崎一弥、斉藤眞吾、久保千恵子、竹田涼子、畑陽子、足立千春、黄嘉慧		

6．本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただいた。（順不同・敬称略）

服部明信、服部善一、服部勝、小島喜三、北村庄嗣、岩井勘造、白川区、上原真人・西山良平・元木泰雄・西村謙司（京都大学）、狩野久（岡山大学）、増淵徹（京都橘女子大学）、磯野浩光・山口博・森正・有井広幸（京都府教育委員会）、南孝雄（財団法人京都市埋蔵

文化財研究所)、波部健（宇治田原町教育委員会)、平等院、宇治市歴史資料館。

7．本書の編集は、宇治市教育委員会歴史資料館文化財保護係が行い、実務を浜中邦弘が担当した。本書の執筆分担は下記のとおりである。

白川金色院跡

Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ－A・C・D・E，Ⅴ…… 浜中 邦弘

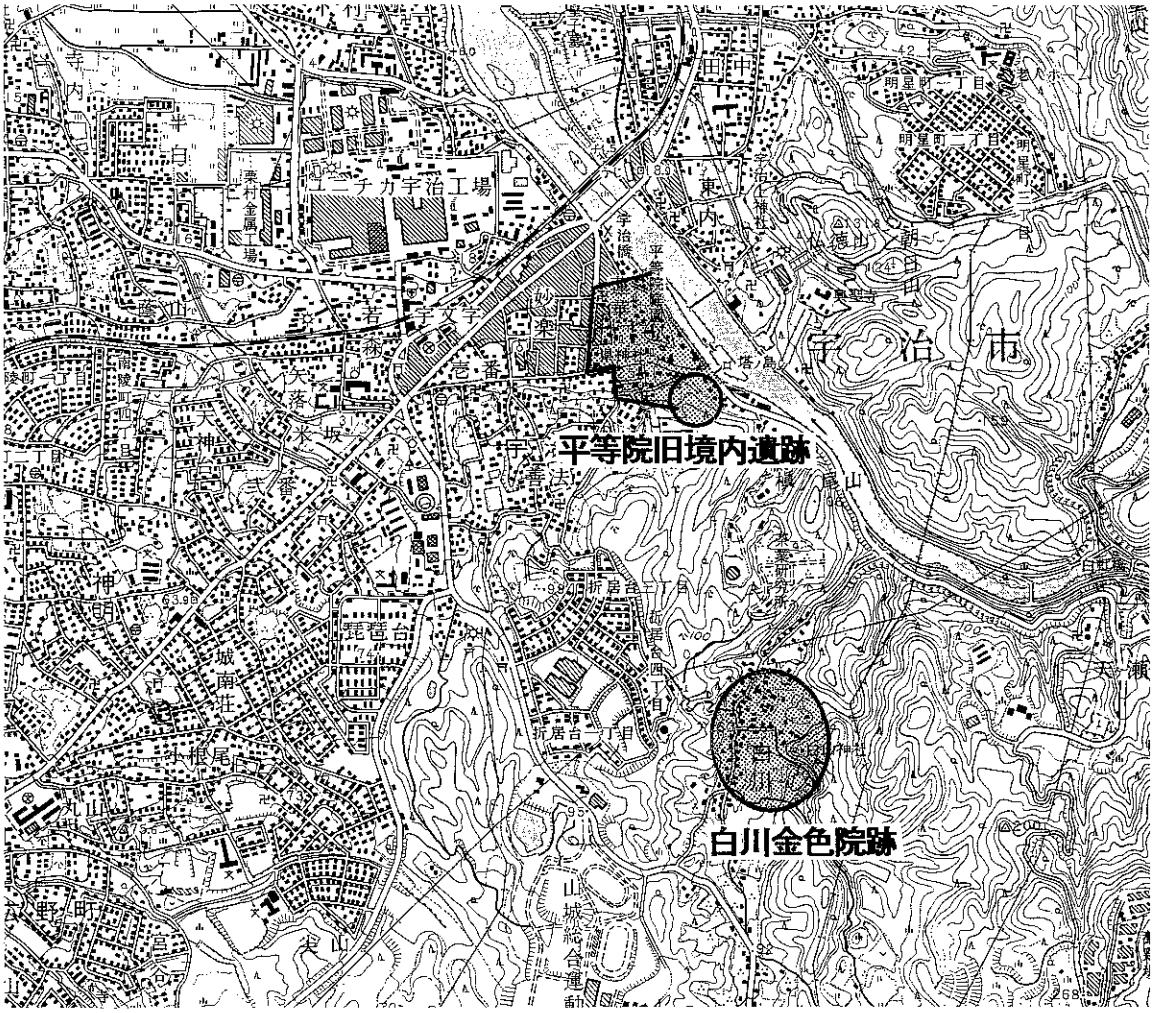
Ⅲ－B，Ⅳ…… 中井 淳史

平等院旧境内遺跡

Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ－B・C，Ⅴ…… 浜中 邦弘

Ⅳ－A…… 中井 淳史

Ⅳ－D…… 斉藤 眞吾



収 録 遺 跡 （1/25,000）

本 文 目 次

白川金色院跡発掘調査概報

Ⅰ はじめに …… 1

Ⅱ 調査の経過 …… 2

Ⅲ 検出遺構 …… 5

A．第3調査区6トレンチ …… 5

B．第2調査区2・3トレンチ …… 8

C．第5調査区7・8トレンチ …… 10

D．第1調査区1トレンチ …… 12

E．第4調査区4・5トレンチ …… 12

Ⅳ 出土遺物 …… 13

A．3トレンチ出土遺物 …… 13

B．6トレンチ出土遺物 …… 14

C．8トレンチ出土遺物 …… 16

Ⅴ まとめ …… 18

平等院旧境内遺跡発掘調査概報

Ⅰ はじめに …… 19

Ⅱ 調査の経過 …… 20

Ⅲ 検出遺構 …… 23

Ⅳ 出土遺物 …… 29

A．土器 …… 29

B．瓦 …… 32

C．木製品 …… 34

D．前代遺物 …… 37

Ⅴ まとめ …… 38

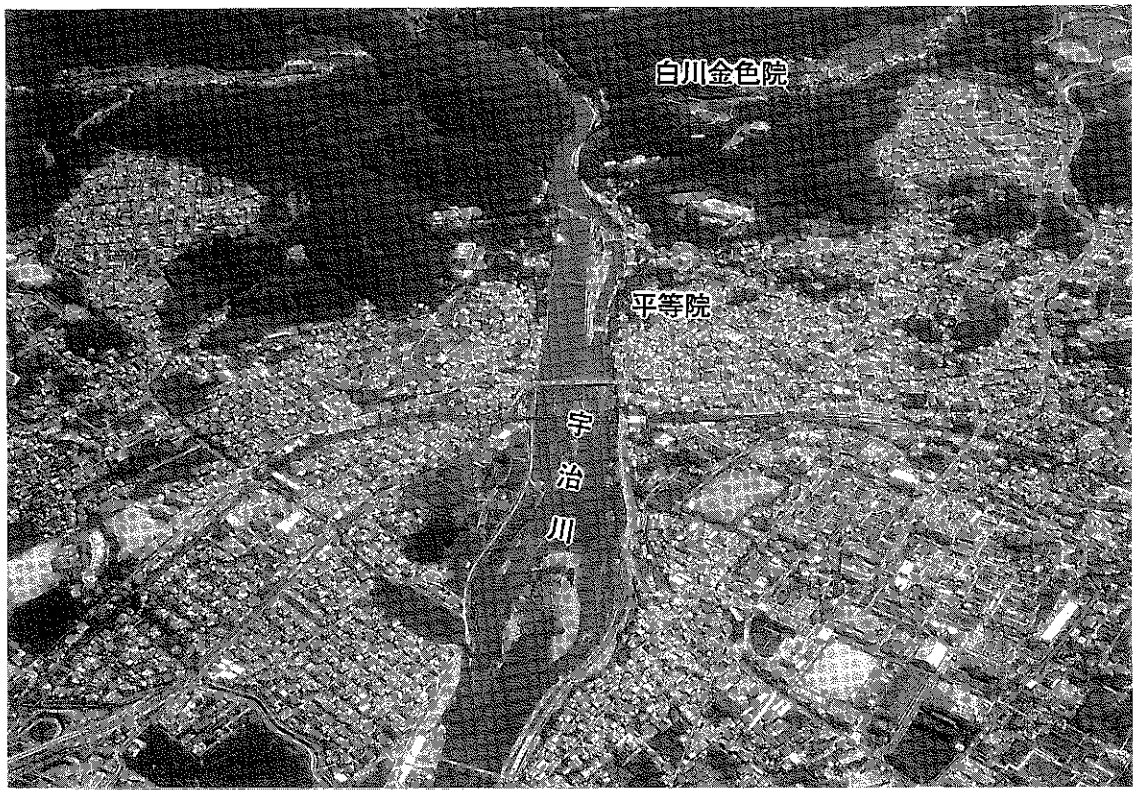
白川金色院跡発掘調査概報

Ⅰ はじめに

白川金色院は、平安時代後期の康和４年（1102）に関白藤原頼通の娘にあたる四条宮寛子（後冷泉皇后）によって創建されたと伝承される寺で、白川宮の前・宮の後・姿婆山一帯に寺跡が展開する。金色院の想定寺域は、南北400m、東西200mと広大な範囲を示し、現在はその大半が水田・茶畑と化している。

史料によれば、室町時代には数多くの坊を有する中世的寺院として発展をむかえるが、江戸時代前期にはすでに衰退の兆しが始まり、幕末まで残っていた文殊堂や福泉坊も明治の廃仏毀釈によって破却、廃寺となったようである。現在、寺跡には金色院鎮守の白山神社や惣門、寛子の供養塔と称される九重石塔等の遺産が残され、寺跡を含めて今もなお往時の面影を良く残している。

今回の調査は、土地所有者である服部明信氏・服部善一氏・北村庄嗣氏、白山神社総代である小島喜三氏の御協力を得て、白川宮の前８番地の１、宮の後９番地・２番地・３番地の３、姿婆山16番地の14、植田７番地において発掘調査を実施することとした。



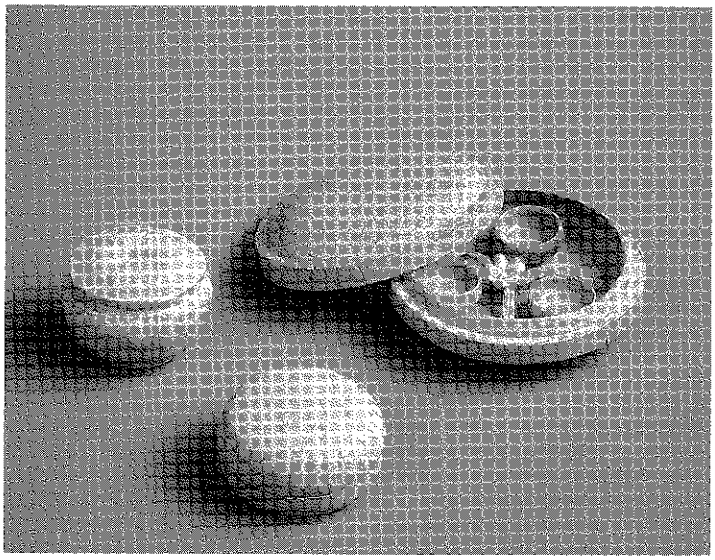
第１図　宇治川谷口部上空写真（西から）

Ⅱ 調査の経過

A．過去の調査

白川金色院跡は、範囲及び内容確認を目的として平成５年度より調査を開始した。今年度はその６ヶ年目にあたる。これまでの発掘調査によって従来伝承の域をでることのなかった白川金色院は、かなり具体的な形でその歴史的な姿をよみがえらせることができた。と同時に総体として遺跡そのものの状態が極めて良好であることが判明し、周辺の景観もほとんど変化することがなく、白川金色院の所在する盆地全体がその当時の風景を残すまさに第一級の寺跡であることが明らかとなってきたのである。

白川金色院跡は継続調査以前に一度調査が行われている。白川区集会所建設に伴っての調査で、江戸時代の古絵図にみえる弁天池・弁天島の跡を検出、池の埋土から11世紀後半に比定される土師器皿が出土し平安期金色院の一端を垣間見ることができた。この調査は緊急調査でありその後の進展はなく、忘れさられることとなった。平成５年度から継続調査が開始、初年度では平安後期河内系の平等院と同笵軒瓦が出土し、平等院との接点が初めて見出せた画期的な発見となった。平成６年度調査では、金色院の中心域より離れた南側の棚田上で室町中期の金色院再興時に造営された坊跡が検出された。坊を構成する建物・庭園の実態が良く理解でき、特に坊の主屋にあたる建物が、中世では絵巻物や文献資料でしか見ることのできない『主殿造』とも呼ぶ建築様式で造られており、今回の検出は初の実例として注目をあびた。平成７年度の調査では待望の平安期の仏堂跡が見つかり、平成８年度の詳細調査で12世紀初頭に創建された一間四面堂であることが明らかとなった。この年代観は寛子創建説が示すそのものであり、問題は残しつつも『勧進状』の記載を裏付ける大きな成果となった。



第２図　経塚出土の陶磁器（平成９年度調査）

平成９年度の調査では白山神社背後の裏山山頂で平安末期の経塚遺構が検出され、経筒本体こそ失われていたが、副納品の豪華な有様には目を見張るものがあった。このような成果を踏まえた上で今年度の発掘調査を開始した。

B．今年度の調査

今年度の当初の調査予定地は、姿婆山16番地の14、宮の後９番地、宮の前８番地の１、植田７番地の計４カ所（順に第１～４調査区）であった。

調査途中に宮の後２番地・３番地の３において個人住宅の建設が知らされ、緊急的に当該地の発掘調査を小規模ながら実施した。これを第５調査区とした。調査区は結果的に計５カ所となった。

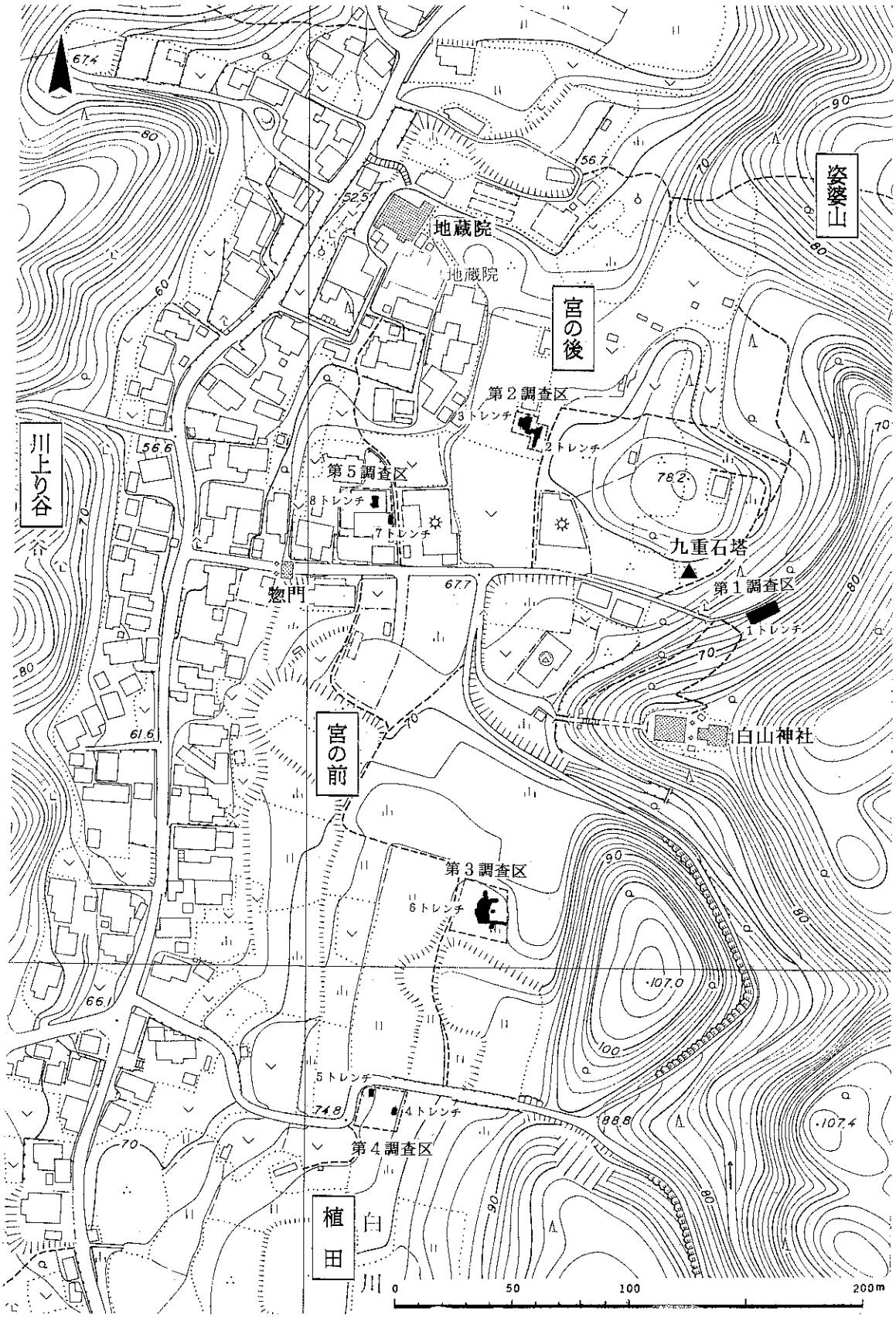
第１調査区は昨年度からの継続調査で、閼伽井跡の調査である。昨年度の調査では閼伽井跡の調査で、今年度の調査は閼伽井の北側に窪地となっている地点を実施した。調査の結果、窪地は想定した窪地＝池跡という単純なものではなく、諸施設が閼伽井に付設されていることが明らかとなった。第２調査区では地表面から0.4m程下の地山面で柱穴痕が検出され、可能な限り調査範囲を広げたが、調査区が狭いために建物の詳細は明らかにできなかった。第４調査区は遺跡の南側の広がりを確認するために設定した地区で、地下水豊富で土壌のグライ化が著しく遺構は明らかにできなかったが、瓦や土器等の遺物が少量出土し周囲に遺構の存在が想定された。第３調査区は平成６年度に検出した中世坊院跡東側の小平坦面で、最も遺構検出の望みが薄いと考えていた地区である。人力によるグリッド調査（３カ所）で遺構の有無確認を行ったところ、内２カ所で焼土層や土器が検出されたため、急遽重機を呼び面的調査に変更し調査を行った。その結果、新旧２時期にわたる礎石建物が確認された。焼土が部分的に３層みられたため、地区割を設定し、各地区ごとに漸次掘り下げた。第５調査区は、計２カ所にトレンチを設定した。短期間の調査のため、十分な調査はできなかったものの一定の成果はあげることができた。平面図・断面図・位置図の図面作成及び写真撮影等の記録作成は、遺構の全容が概ね明らかとなった頃から行った。

発掘調査終盤の３月10日に報道への発表を行い、３月13日に現地説明会を実施した。

埋め戻しに関しては、遺構保護のため良好な状態の箇所にのみ寒冷紗を敷き、掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻し作業を行った。

すべての作業を終え、復旧したのは３月19日であり、同日をもって発掘調査を終了した。発掘調査面積は結果的には計250㎡となった。

第３図　発掘作業風景


姿婆山
地蔵院
地蔵院
宮の後
第２調査区
３トレンチ
２トレンチ
川上り谷
第５調査区
８トレンチ
７トレンチ
九重石塔
第１調査区
１トレンチ
惣門
白山神社
宮の前
第３調査区
６トレンチ
５トレンチ
４トレンチ
第４調査区
植田
白川
0
50
100
200m

第４図　発掘調査地点図

Ⅲ 検 出 遺 構

今回の発掘調査は第１～５調査区にわけて実施した。第１調査区では幕末期頃の閼伽井跡とその周辺の状況、第２調査区では12世紀後半から13世紀代にかけての掘立柱建物、第３調査区では12世紀前半から13世紀後半にかけての礎石建物、第５調査区では15世紀後半を中心とする土器溜り等がそれぞれで検出された。現在のところ、各調査区で見つかった遺構の詳細は、遺物同様整理途中である。このためここでは各調査区の主要な成果の概略について述べていくこととする。

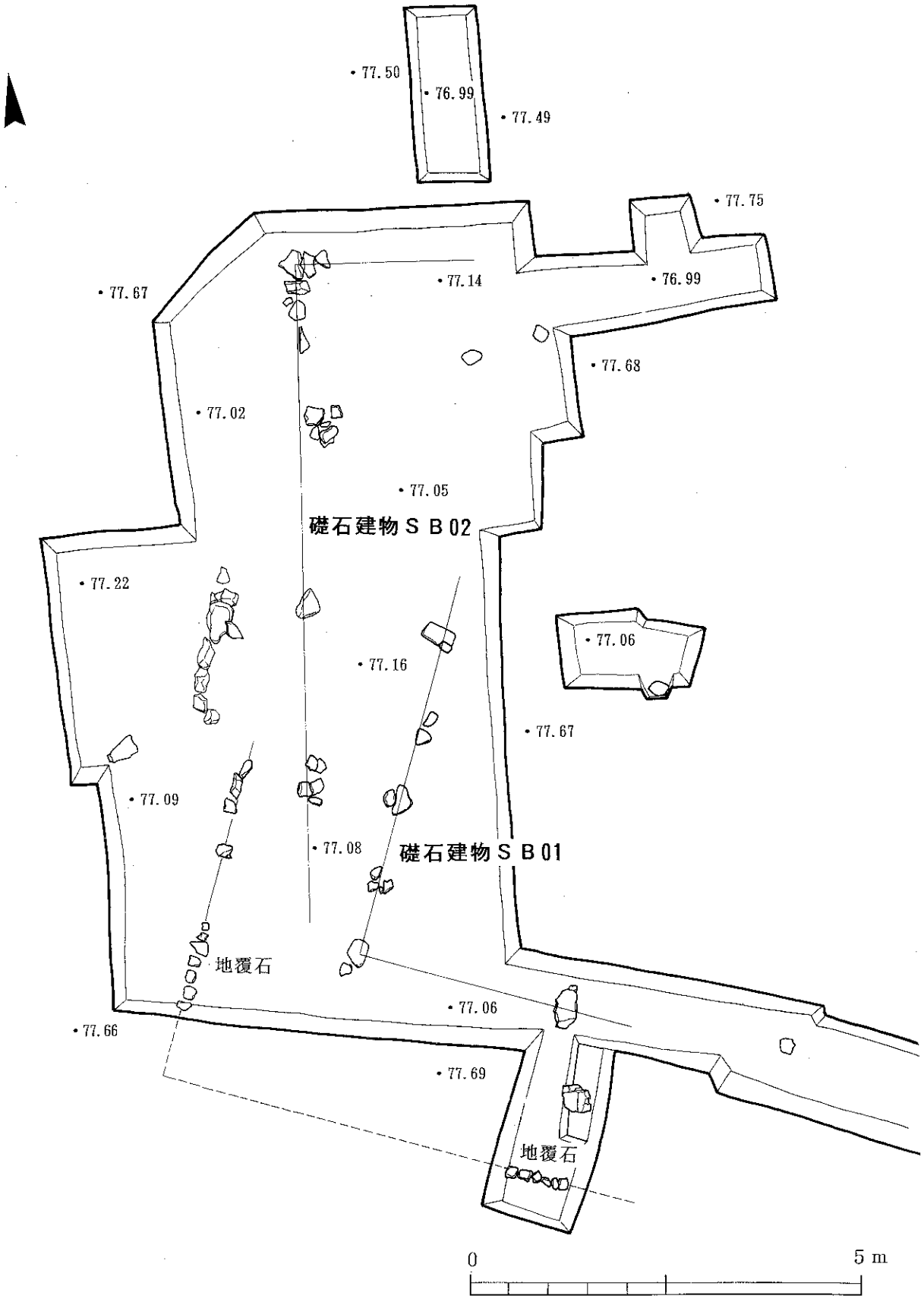
Ａ．第３調査区６トレンチ（第５～８図）

調査区は、雛段造成によって平坦面となっているが、造成前は南から北にむかって小さく張り出す丘陵突端部の斜面地になる。立地的には金色院の想定中心域を一望することのできる眺望の良いところである。平坦面の標高は77.5～77.7ｍで、南から北に向かってわずかに傾斜する。本調査区で検出した主な遺構は、礎石建物ＳＢ01・02である。

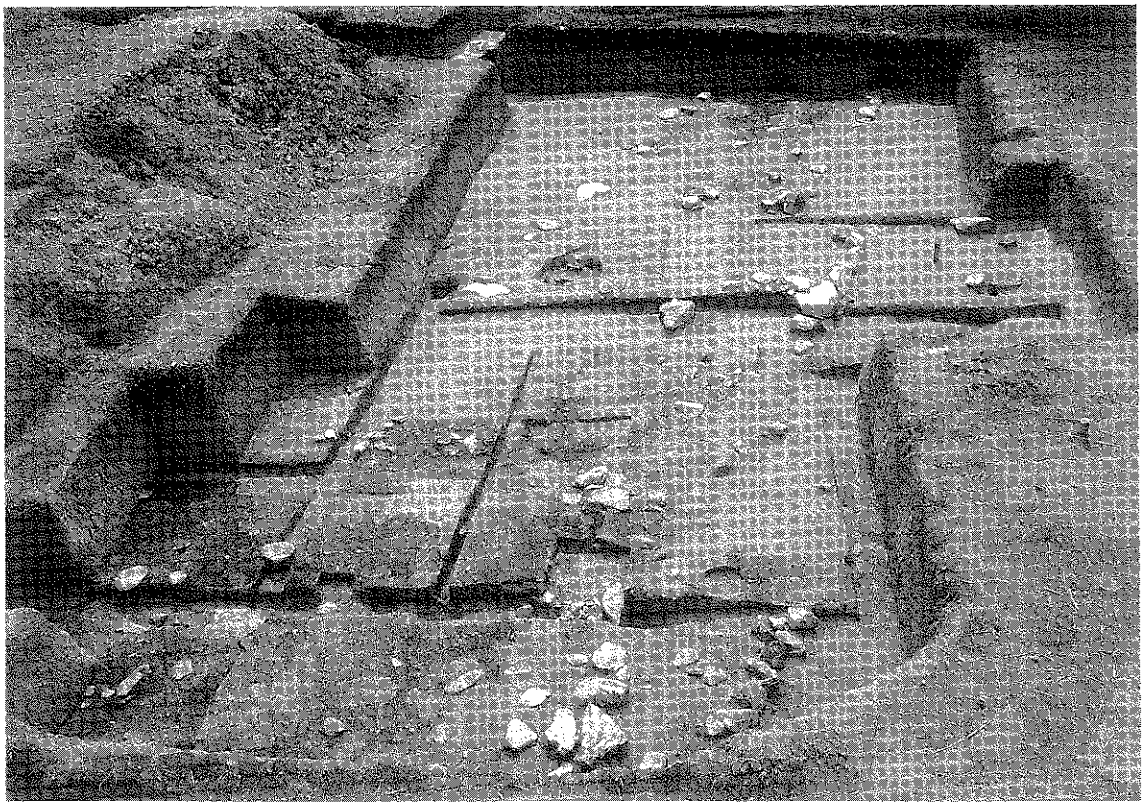
土層の状況　基本的には比較的単純な平行堆積状況を示す。現在は休耕田であるが、以前は水田で耕作土とその下に床土が検出された。その下層には灰褐色系の土層がみられ、その下に黄褐色土層が検出された。これら２層も一連のものとして考えられ、上層が耕作土で下層が床土と考えられる。これらを除去すると、遺構面があらわれた。現地表面から検出遺構面までの深さは約0.6ｍである。標高では76.8～77.2ｍを測り、全体的には西から東に向かって緩やかに傾斜している。

礎石建物ＳＢ01　建物の南西部を検出した。東西に１間（2.8m）、南北に２間（4.4m）が確認されたものの全体の規模は明らかにできなかった。建物は、現況では南北に細長い西側正面の建物ではないかと想定される。建物の周囲には縁石の可能性が考えられる小石がみられたものの確実なデータは今回得ることはできなかった。南北に並ぶ礎石３基は直径35㎝程の石で、直径20㎝程の小振りの石を礎石横に配していた。礎石間を２等分する位置には直径20㎝程の石が２・３個纏まって出土した。礎石列に平行してその外側２ｍ程離れたライン上には地覆石が巡っていた。地覆石には直径10㎝程の小石が使用されていた。南北礎石列の外側３ｍライン上にも長さ1.5ｍの建物軸に平行する石列がみれらた。土層の状況から礎石建物ＳＢ01の創建当初にはなく、後に付設されたものと思われる。階段に付設する地覆石か。

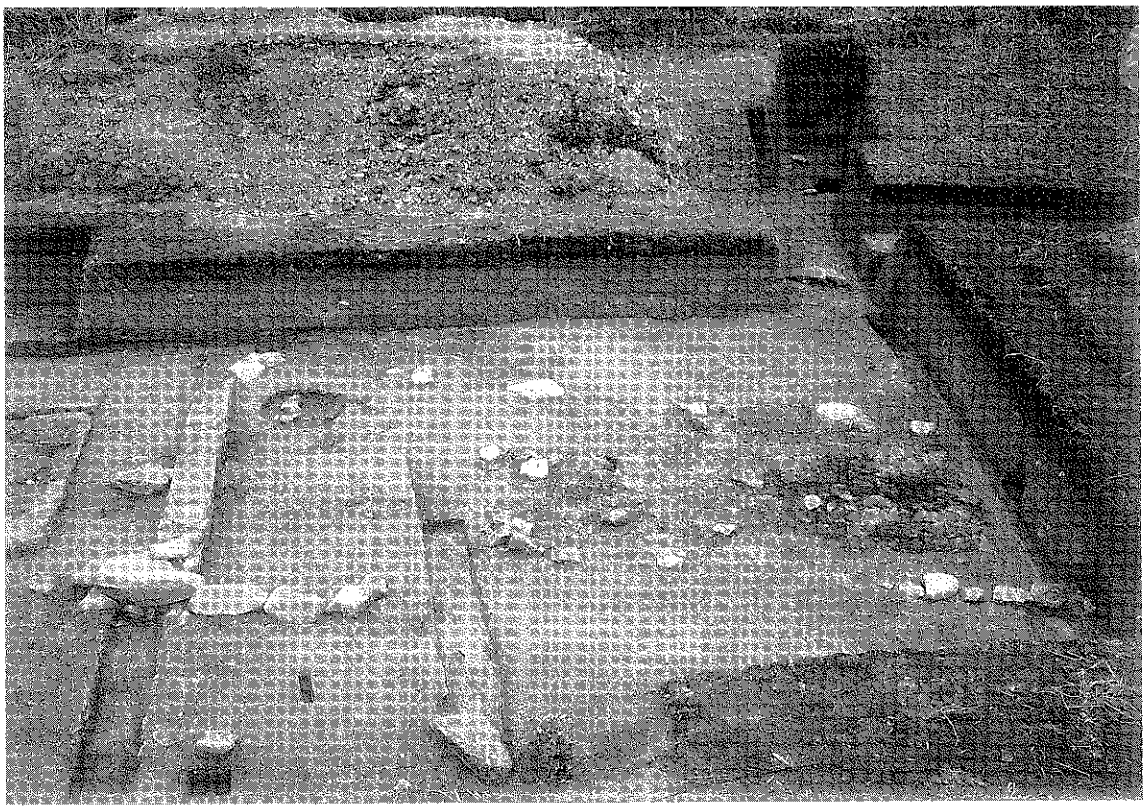
礎石建物ＳＢ02　南北に並ぶ礎石列が確認されただけで全体の詳細な状況を知るてがかりを得ることができなかった。この建物の北側で重層的になっている焼土層が検出された。この焼土層に関してはこの建物に付随するか否かは今回明らかにしえなかった。



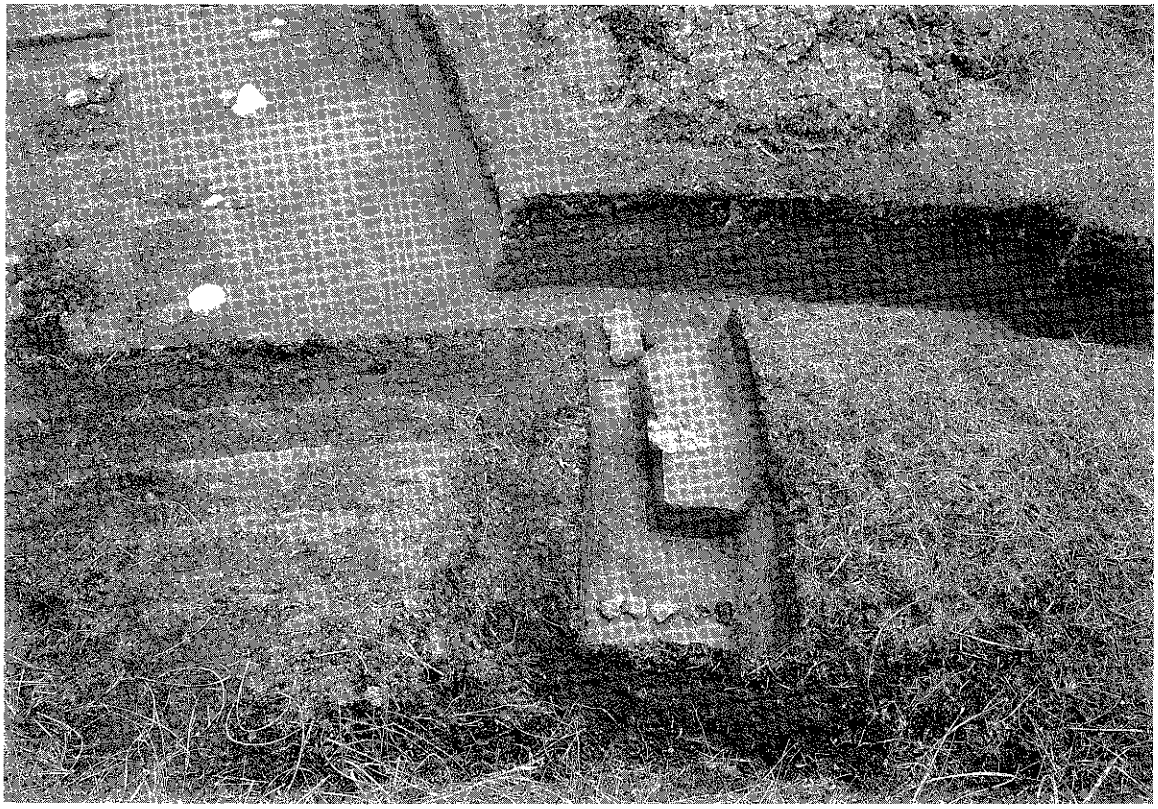
第５図　第３調査区６トレンチ検出遺構略図



第６図　第３調査区６トレンチ全景（南から）



第７図　第３調査区６トレンチ礎石建物 SB01（東から）



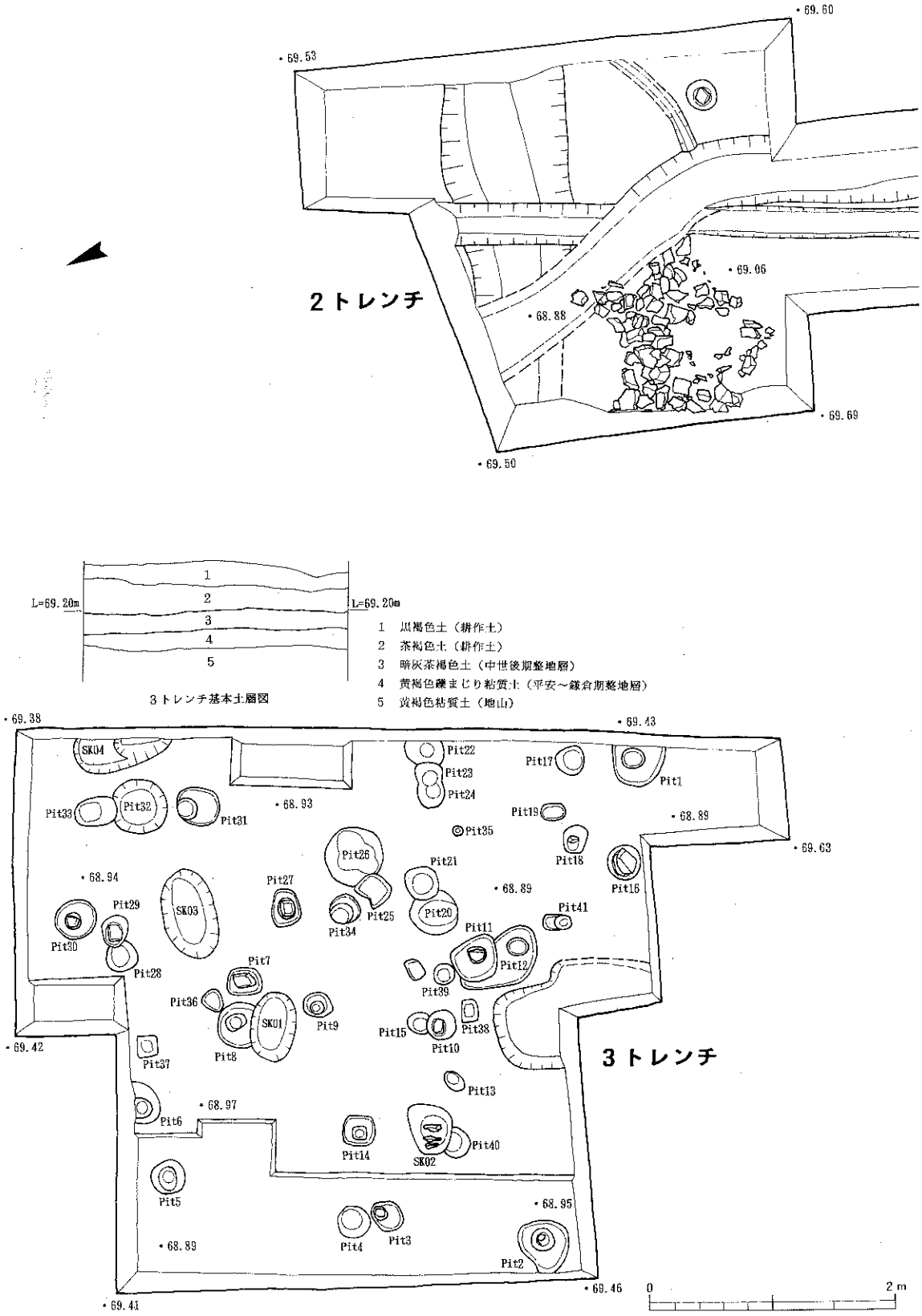
第８図　第３調査区６トレンチ礎石建物 SB01 の南側面部（南から）

B．第２調査区２・３トレンチ（第９・10図）

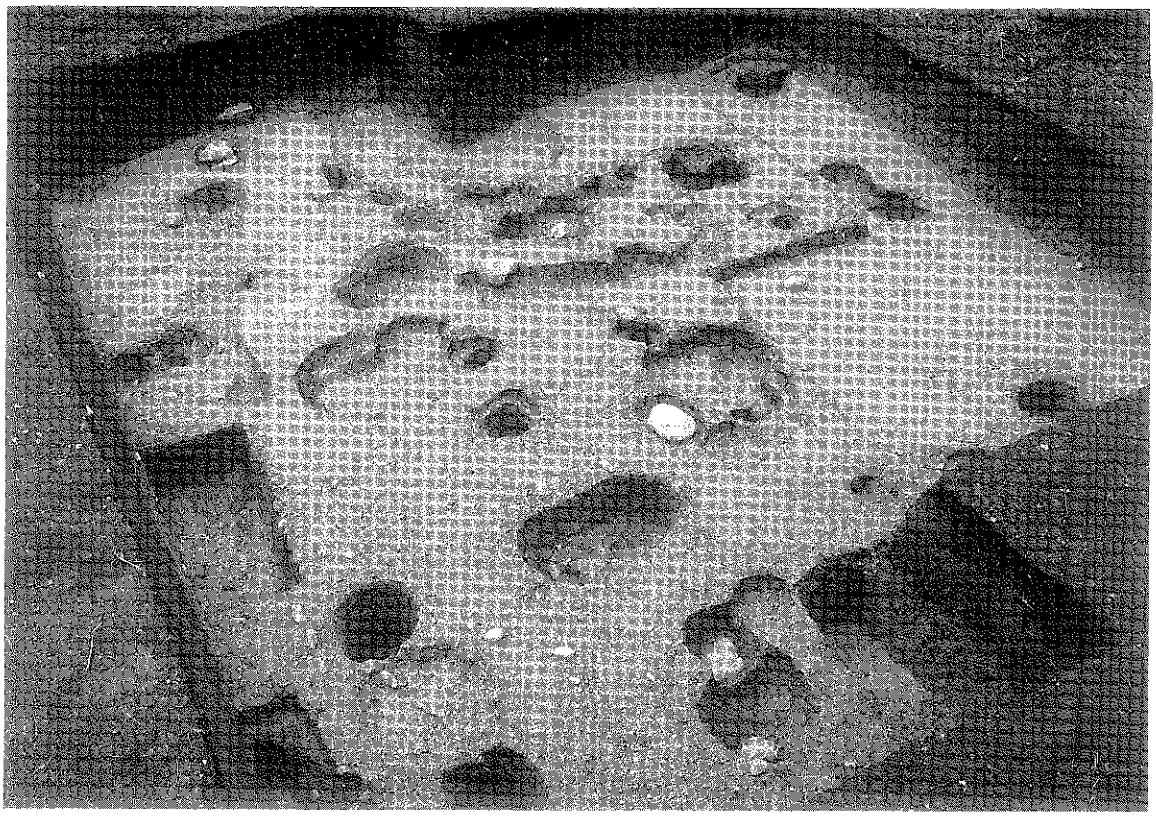
２・３トレンチは、昨年度調査した福泉坊の北側にあたる平坦地に設定した。トレンチ設定地点は調査着手時には畑として利用されていた。２トレンチでは、近世の素掘り溝が検出されたものの、中世以前の遺構はみつからなかったので、３トレンチの成果のみ報告する。

土層の状況　耕作土である黒褐色土、茶褐色土層の下に、中世の遺物が包含される暗茶褐色土が続く。15世紀の土器が含まれており、中世後期の段階で整地されたものと思われる。この下に暗灰茶褐色土や礫が混じった黄褐色粘質土層が、さらに不純物の少なく、遺物を含まない黄褐色粘質土層が下に続く。遺構はこの２面確認できた黄褐色粘質土層の上層上面で検出された。黄褐色粘質土層の上層は整地にともなう盛土であり、下層が地山と考えられる。

遺構が確認できたのは、黄褐色粘質土上層上面だけであった。ここでは、平安時代から鎌倉時代にかけての土壙やピットが多数検出された。いずれも規則的な配列は認められず、切り合いも多い。建物の復原は困難であるが、掘立柱建物が何度か建て替えられながら存続していたことはまちがいないと思われる。ピット埋土から出土した土器の年代観から、これらの遺構は12世紀後半から13世紀にかけてのものと考えられる。なお、地山である黄褐色粘質土下層上面でも、ピットがいくつか検出された（Pit２～４）。層位的に二時期考慮できる余地もあるが、地山層まで掘削できた面積が少ないため、可能性を指摘するにとどめたい。



第9図　第2調査区2・3トレンチ平面図・3トレンチ基本土層図（1/30）



第10図　第２調査区３トレンチ全景（北東から）

C．第５調査区７・８トレンチ（第11・12図）

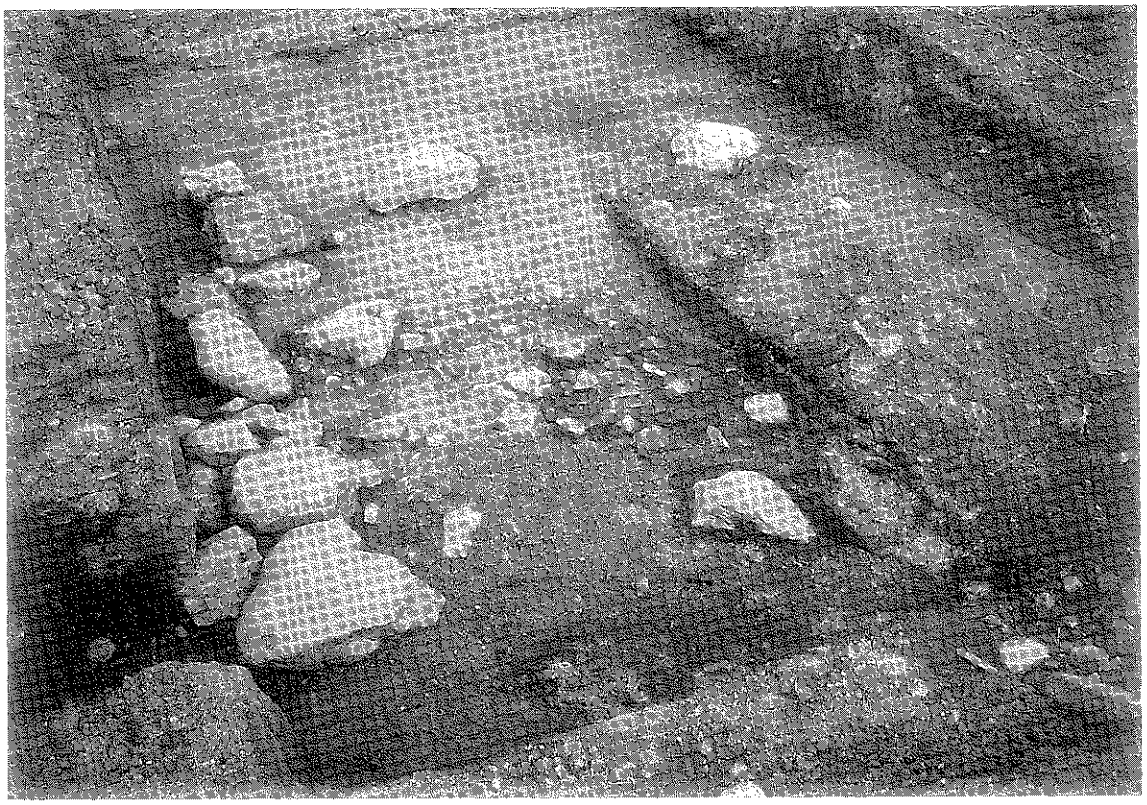
小規模なトレンチを計２カ所設定し、それぞれ７トレンチ・８トレンチとした。

７トレンチでは地表面から30～40㎝程下で遺構面が確認された。主な遺構は方形の石積み遺構１である。南北0.6m、東西0.5m、深さは残存部で0.45mである。転落石が遺構埋土に多数含まれ、本来は現状よりも数段多く石が積まれていたと思われる。底面にも石が貼られ、底面ほぼ中央に25㎝程の平坦面をもつ石を中心にそれを取り囲むようにその周囲三方向に石を一段高く積み上げコの字形に巡らせていた。遺構埋土の遺物は細片しかなく、詳細な時期は不明だが、江戸時代の遺構と理解される。

８トレンチでも同様に地表面から30～40㎝程下で遺構面が確認された。トレンチの南東側1/4は攪乱で、詳細な状況は不明。トレンチ西端で、南北で並ぶ石列が確認された。部分的ながら東側で石の面が揃っており、この石列を伴う遺構はトレンチの西側に広がっていくものと思われる。建物の地覆石であろうか。またトレンチの中央南寄りで南北1.3m、東西0.8mの楕円形状に広がる土器溜りが検出された。15世紀後半から16世紀前半の土器群である。金色院では当該期の遺物が少量しかなかったため、貴重な資料となった。

それぞれ一部断割を行い下層部分を調査し、８トレンチ地点では概ね地山面が検出面で露出しており、７トレンチ地点では、深さ0.5m以上の盛土造成がなされていると理解された。

第11図　第５調査区７トレンチ全景（南から）



第12図　第５調査区８トレンチ全景（南から）

第13図　第１調査区１トレンチ全景（南東から）

D．第１調査区１トレンチ（第13図）

昨年度の調査で湧水地点の閼伽井とその周辺の調査を行った。昨年度に想定した内容とは異なる成果が挙がった。特に大きく異なったのは閼伽井の西側に広がる窪地が池跡ではなかったことである。そして閼伽井の西約6.5m地点に幅2.5m程の方形状の小池跡が検出された。この池跡と閼伽井は0.7m幅をもつ礫敷遺構で繋がっていた。状況からみてこの礫敷遺構は、水路の役割を担っていたと考えている。すなわち閼伽井からオーバーフローした水がこの礫敷をつたい、下にある池跡に流れたものと考えるのである。そしてこの池跡で一端たまった水もまた一定量を越すとオーバーフローして排水路そして寺川へと流れ出したと思われる。池跡周辺には護岸状の石積みを始めとして石が多様に使用されている。排水路は基本的には素堀り溝で部分的ながら石が配されている。小池跡西側の石積み付近でかわらけがある程度まとまって出土した。この地点以外ではかわらけはあまり出土しておらず、この池跡がもつ性格がこれらのかわらけに投影されているものと思われる。

今年度の発掘調査で全貌が明らかとなったのは幕末頃の姿であって、幕末以前の状況を知る資料は十分にえられず、今後の課題として残ることとなった。

E．第４調査区４・５トレンチ

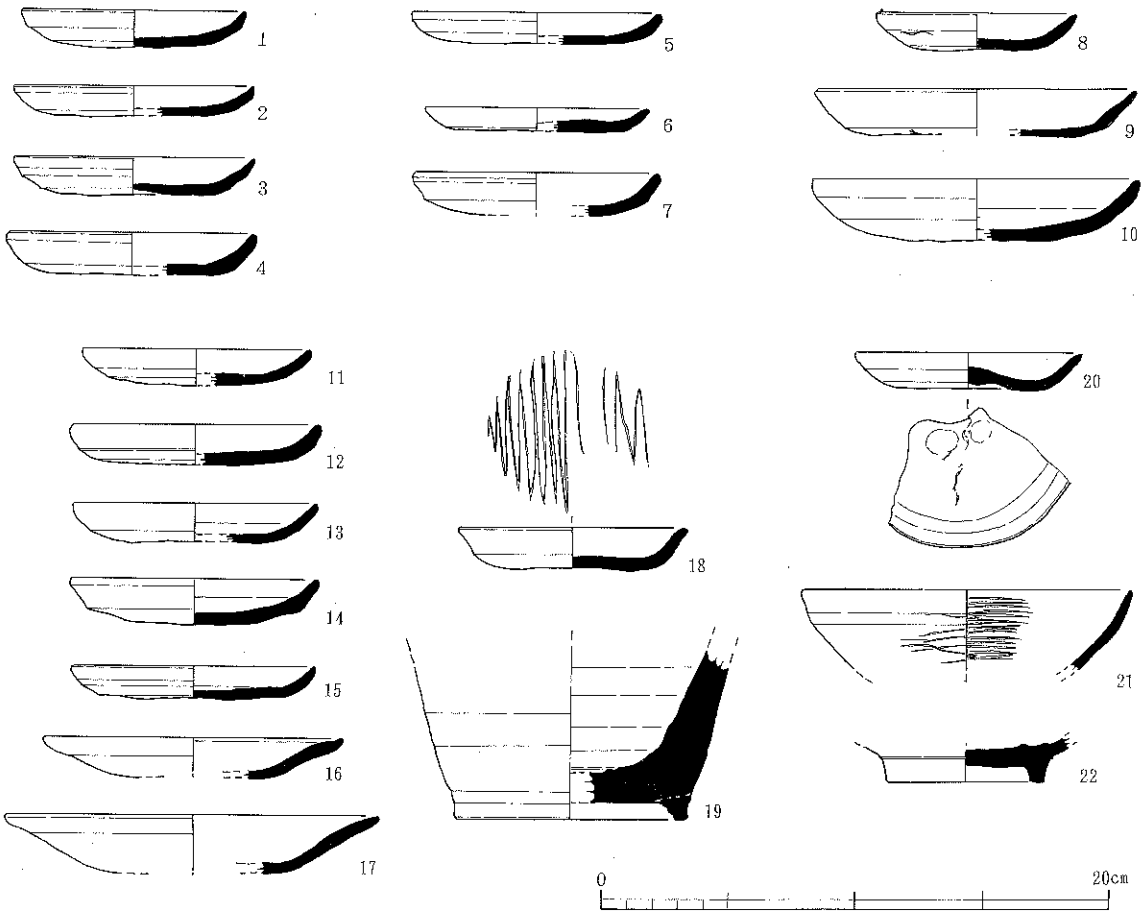
顕著な遺構は確認できなかったものの、瓦片・土器片が少量ながらも出土し、周囲に遺構の存在が想定された。

Ⅳ 出 土 遺 物

今回の調査では、コンテナにして約30箱程度の遺物が出土した。ここでは、出土遺物の多かった第３・６・８トレンチの出土遺物に重点をおいて概要を報告したい。

A．３トレンチ出土遺物（第14図）

土師器皿は比較的精良な胎土のもの（１・３・６・８・13～16・20）と砂粒を含み、ざらつきのあるもの（２・４・５・７・９～12・17）の２種類がある。色調は淡赤褐色や茶褐色のものが多い。調整は底部内面をヨコナデした後に、口縁部内外面をナデるという順序でなされているが、全体的にナデ調整は弱く、不明瞭である。１～４はPit２出土。口径10cmのものが多い。１・３はやや内湾する体部で、口縁端部には２段ナデを施す。２は体部外面の幅広い範囲をナデ、口縁端部に弱い面取りを施している。暗灰色。４も同じ調整手法である。５はPit14出土。浅い内湾気味の体部をもつ。口縁端部には不明瞭な面取りが施されている。13世紀。６・７はPit19出土。６は底径が大きい。体部は直線的にたちあがる。７は２段ナデ。ナデが施される範囲は体部外面ほぼ全体に及ぶ。12世紀後半か。８～10はPit31より出土。口径8.0cmと13.0cmの大小２法量がある。８は橙褐色で、体部外面に横行する接合痕が確認できる。９は６と同形態の皿。比較的器壁が薄く、直線的にたちあがる。１段ナデ。10は２段ナデの皿。砂粒が多い点を除けば、調整は丁寧になされている。11～19は黄褐色粘質土層上面で出土。口径は10cm前後のものがもっとも多い。11は口径9.0cm。非常に弱い２段ナデが施される。12は体部が内湾してたちあがる。体部外面にハケ目痕がうすくのこる。13も内湾気味にたちあがる体部の広範囲を２段ナデする。本例は比較的器壁が薄い。14はハケを用いて口縁部外面を調整する。底部も若干丸みを帯びており、形態、調整手法ともにほかの資料とは異なる。15は乳白色で、器高は低い。体部は直線的にたちあがる。16・17は強く外反する体部をもち、平底の皿。口径はそれぞれ12.0cm、15.0cm。18は瓦器皿。口縁部が強く外反し、底部外面にはユビオサエの痕跡がのこる。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。19は陶器の壺。底部のみ残存する。外面には赤茶褐色の自然釉がうすくかかる。高台は貼り付けている。渥美窯の製品か。20～22は暗灰茶褐色土層中より出土。20は土師器皿。底部には粘土帯を引き合わせた痕跡が明瞭にのこる。粘土帯をまるく折り曲げて成形している。21は瓦器椀。口縁部は直立し、体部内外面にヘラミガキを施す。楠葉型Ⅱ－３期の資料か。22は白磁椀の底部。底径6.2cmを測る。削り出し高台で、見込み部分には蛇の目状に釉をかきとっている。横田・森田分類のⅧ類。このほか、龍泉窯系蓮弁文青磁椀、瓦質土器香炉、石鍋などが出土した。

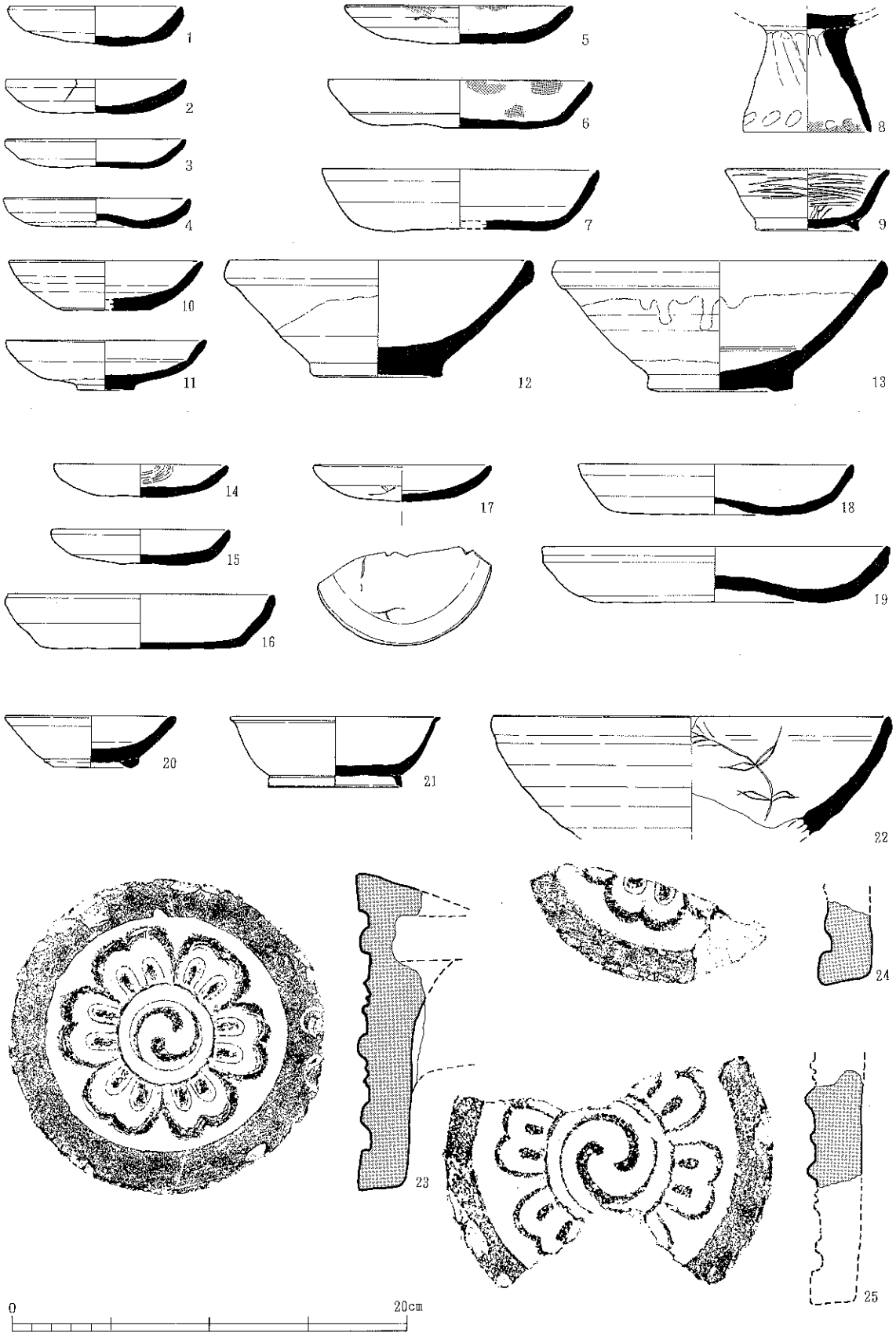


第14図　第２調査区３トレンチ出土遺物（1/3）

ピット群から出土した資料は、時期幅がみとめられるが、大半は12世紀後半から13世紀代の遺物が多い。黄褐色粘質土層上面の資料もほぼおなじような傾向を示す。ただ、暗灰茶褐色土層から出土した16・17など、一部には15世紀後半代の資料もみられる。掘立柱建物の造営は平安時代後期から鎌倉時代にかけて継続的になされ、その後、15世紀後半ごろに整地がなされたと考えられよう。

B．６トレンチ出土遺物（第15図）

１～８は土師器皿。１～３は端部がやや角張り、面取りを施している。４は２段ナデ。５は口径11.6cm。淡褐色で、端部に２段ナデを施す。形態的にはほかの資料と大きく異なる。６・７は比較的器高の高い皿。ナデ調整は不明瞭であるが、６は２段ナデ、７は１段ナデを施す。８は台付き皿の脚部。棒状の工具を用いて脚部を接合している。高台内面に煤が付着する。９は瓦器小椀。高台径が比較的大きい。仏具の六器を模したものと考えられる。見込みに暗文を施す。10・11は青磁皿。10は底部を静止糸切りし、内湾気味にたちあがる。底部以外は灰色の釉をかける。11は体部の中央で屈曲し、わずかに段をなす。黄灰色の不透明釉を体部内外にかける。高台は円盤状で、小さく削りだされている。12・13は白磁椀。灰色を



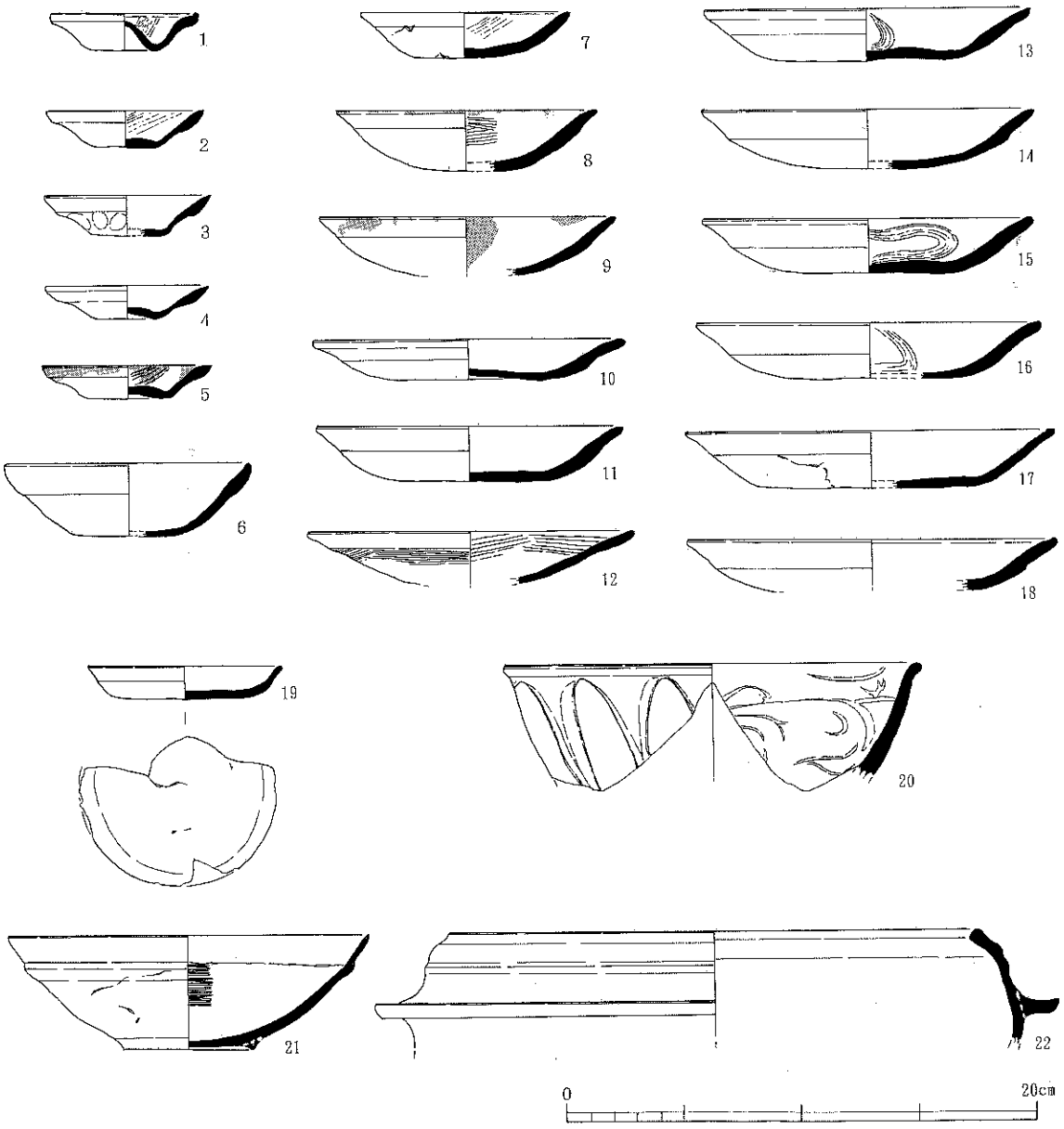
第15図　第３調査区６トレンチ出土遺物（1/3）

帯びた釉薬を厚くかける。これらは焼土層から出土した。横田・森田分類のⅣ類。14～19は土師器皿。14・15は口径9.0㎝。淡灰褐色。14は直上するナデ上げを施す。15は口縁端部を弱く面取りする。16は深手の皿。１段ナデで、端部を面取りする。淡赤褐色。これらは黄褐色土層から出土した。17は淡灰褐色土層出土。口径9.0㎝で、口縁部は内湾する。１段ナデ。底部外面にはＹ字状の粘土の接合痕がのこる。18・19は黄灰色砂質土層上面にて完形で出土した。18は口径14.0㎝、19は17.6㎝。ともに淡黄褐色で精良な胎土である。２段ナデ。20は尾張産の山皿。口径8.4㎝で、胎土はざらつきがある。高台は粗雑に貼り付けられている。21は緑釉陶器の小椀。体部は比較的直線的にたちあがり、端部は外反する。底部を回転糸切り後、有段の輪高台を貼り付ける。見込みにはトチンの跡がのこる。近江か東濃の製品であろう。22は灰釉陶器の椀か。淡灰色で、胎土は砂粒を少量含む。内湾する体部の内面に草花文をヘラで陰刻する。20～22は淡灰褐色土層より出土。軒丸瓦（23～25）は同タイプの複弁六弁蓮華文を主文とするものである。平安時代後期、河内系。このほか内区を４条の重弧文でめぐらし、外区内縁に珠文を配する軒丸瓦が１点出土した。同文は浄妙寺跡[1]に１例ある。

以上の資料は、その大半はおおむね12世紀後半から13世紀前半ごろに位置づけられる。ただし、21は10世紀後半のものであり、白川金色院創建以前に当地が何らかのかたちで利用されていた可能性を示すものである。

Ｃ．８トレンチ出土遺物（第16図）

土師器はすべて土器溜りＳＸ01より出土した。このほかの遺物は包含層からの出土である。１～18は土師器皿。全体的に胎土は精良で、色調は赤褐色～橙褐色のものが多い。内面はいずれも見込みを一方向ナデしたのち、底部内面をヨコナデしてナデ上げる。１はへそ皿。底部内面をヨコナデし、斜行ナデ上げを施したのち、口縁部を再びナデて端部をつまみあげる。小指の先で底部を押しくぼめており、爪跡がのこる。２～５は体部を強く外反させ、端部を肥厚させる。口径は7.0㎝台に限定される。３には体部外面下半に指頭圧痕がのこる。６は口径10.6㎝、器高3.1㎝の深身の皿。黄灰白色。14世紀代にみられる灰白色系の皿の系譜をひくと思われるが、器高はかなり高い。７～９は丸底で、体部内面に斜行ナデ上げを施す皿。８は体部内面にナデ調整の前のハケ調整の痕跡がのこっている。８・９は灯明皿として利用されている。10～18は平底で、直線的にたちあがる皿。ナデ上げは逆「く」字状を呈する。口径は13.0～16.0㎝の幅で、１㎝きざみで４法量存在する。12は体部内外面にハケ目がのこる。口縁端部のわずかな範囲をのぞいてはナデ調整がなされておらず、特異な資料である。15はナデ上げが口縁部に達せず、逆方向に引き戻してナデられている。このようなナデ上げ処理も例が少ない。17は器壁がやや薄く、たちあがりが比較的はっきりしており、ほかの資料と比べて新相の特徴を示す。18は口径16.0㎝クラスの皿。口縁端部内面に段をなす。19・



第16図　第５調査区８トレンチ出土遺物（1/3）

20は瓦器である。19は皿。暗灰色で、暗文はみられない。底部外面には渦状にはしる接合痕がのこっており、帯状の粘土をまるく巻き上げて成形している。20は瓦器椀。口径15.6㎝、暗灰色で、内面にはヘラミガキがのこる。口縁部の直下が極端に肥厚しており、内面に接合痕がのこる。口縁部を継ぎ足して成形している。大和型の範疇に含まれると思われるが、このような成形は例がない。13世紀後半ごろか。21は龍泉窯系劃花蓮弁文青磁椀。内面には花文、外面には蓮弁文を陰刻する。22は大和型の土師質土器羽釜。口縁部が内湾するタイプである。15世紀。このほか瀬戸産おろし皿、瓦質土器火鉢などが出土した。

19～21は13世紀代の資料である。土師器皿は多少ばらつきはあるが、大半は15世紀後半を中心とした時期におさまるものである。

V　ま　と　め

以上、概略ながら今回の発掘調査成果を述べてきた。今年度の発掘は調査区それぞれに多くの成果をあげることができた。が、現段階ではこれらの成果にある一定の評価を下すところまでには至っていない。ここではこのうち最も重要な成果であった第3調査区を中心に金色院全体の景観についてごく簡単にみてまとめとしたい。

白川金色院跡の発掘調査は今年度を含めて計7回実施している。調査から得られた情報は、金色院が有する歴史的価値を表すには依然不十分だが、それらを繋げることによってわずかながらもその情景が浮かび上がり想定を試みてきた。が、今回の調査から得られた資料によって、これまで考えてきた金色院の創建当初の姿やこの寺の歴史的変遷等再検討しなければならない多くの問題が生まれてきた。これまでの調査によって考えられてきた平安期金色院の寺域は、平成7・8年度に検出された一間四面堂周辺の比較的狭い範囲の中で集中展開し、室町時代中期の再興期にその南側に広がる丘陵を開鑿造成し、寺域を広げ一大寺院として発展していったと考えてきた。すなわち南側の丘陵地は、室町時代に急激に発展をとげたエリアと考えてきたのである。ところが今回の発掘調査でその丘陵地の非常に狭い平坦面の一画から室町時代よりも古く位置付けられる礎石建物が見つかったのである。礎石建物は室町時代にはなくなっている。以上のことから、南側丘陵地に展開する平坦面はほぼ同時期に全体に建物群が配されているわけではなく、平安時代後期の創建頃からすでに建築に伴う雛段造成が行われ、その後も造成がされつづけるも、各平坦地での土地利用の在り方は各時代によって変化を遂げていく。そして現在みる棚田が広がる景観に至ったものと思われる。すなわち南側丘陵地の平坦地は、平安時代から明治の廃絶までの長期間にわたって形成され続けた歴史の錯綜状況を投影しているといえようか。

今回の調査ではその他に閼伽井跡や平安時代から鎌倉時代までの掘立柱建物等が検出された。これらについても金色院を考える上で重要な資料となった。来年度以降の調査ではこれらの成果を十分にふまえながら、往時の金色院の姿を追及していきたい。

最後に土地所有者各位、地元町内会を始め、調査期間中や整理作業中に御指導いただいた多くの方々よりお礼を申し上げ、本報告の終わりとしたい。

註）

1　宇治市教育委員会『木幡浄妙寺跡発掘調査報告』　1992

平等院旧境内遺跡発掘調査概報

Ⅰ はじめに

平等院は、末法初年にあたる永承７年（1052）に藤原頼通によって創建された寺院で、翌天喜元年（1053）に鳳凰堂（阿弥陀堂）が落慶供養、以後師実・寛子・忠実等の頼通一門により境内地に数多くの堂舎が建立された。寺域は現境内よりも広大であったことが記録、地形、地割等から想定されており、平等院旧境内遺跡は、このようなかっての境内地を埋蔵文化財包蔵地として認識するもので、遺跡範囲は南北400m、東西300m程を占める。近年の旧境内地での調査では、四条宮寛子創建の多宝塔跡と想定される基壇建物跡を始めとして、国史跡・名勝指定平等院庭園と異にする平安期の庭園跡等が確認され、在りし日の平等院全体の景観を復原する上での資料が蓄積されつつある。

今回の調査は、昨年度の調査で検出された平安期庭園跡の詳細を明らかにするため実施したものである。調査期間は平成10年８月20日から同年11月10日までで、調査面積は計150㎡程である。土地所有者である岩井勘造氏を始めとする岩井家の方々には全面的な御協力をいただいた。感謝したい。

第17図　国宝平等院鳳凰堂（東から）

Ⅱ 調査の経過

今回の調査目的は、昨年度に検出した庭園跡の詳細な実態を把握することであり、このためまず始めに昨年度検出トレンチの周囲に計５カ所（１・２・３・４・５トレンチ）にわたって試掘トレンチを設定し、その成果に基づいて本格的な調査トレンチを設定することとした。なお樹木伐採が行えないため、トレンチの設定範囲は自ずと制約された。

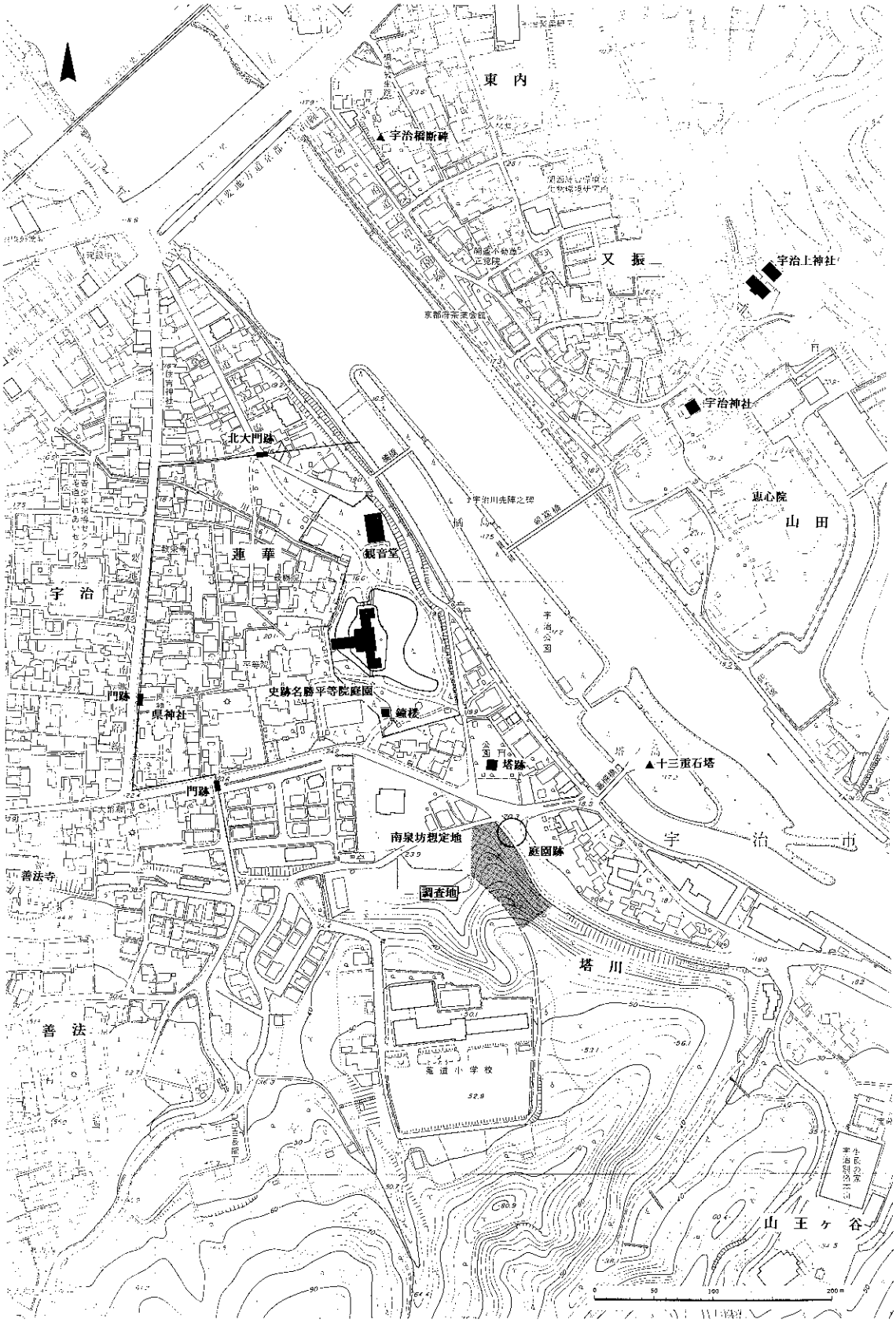
１トレンチでは現地表面から２ｍ程下で遺物を含む青灰色粘質土層が検出されたものの、周辺の状況からトレンチの拡張は不可能で、内容確認にとどめすぐに埋め戻した。２トレンチでは、昨年度検出した近代の別荘跡の続きが確認された。別荘は地山を掘削造成して建てられており、築造以前の痕跡は全く確認できなかった。３トレンチと４トレンチは昨年度に庭園跡を検出したトレンチの東側と南側にそれぞれ設定したトレンチで、庭園の全体像を可能な限り追及拡大していく中で昨年度と今年度とのトータル的な遺構把握の必要性が生じ、このため昨年度トレンチの一部と３・４トレンチを連結させて庭園の詳細な内容確認に努めた。トレンチは細長い１本のトレンチとなり、以後これを３トレンチとし調査を進めた。５トレンチは庭園の東側の広がりを確認するために設定したが、詳細な調査は実施できなかったが庭園の広がりは確認された。

第18図　現地説明会風景

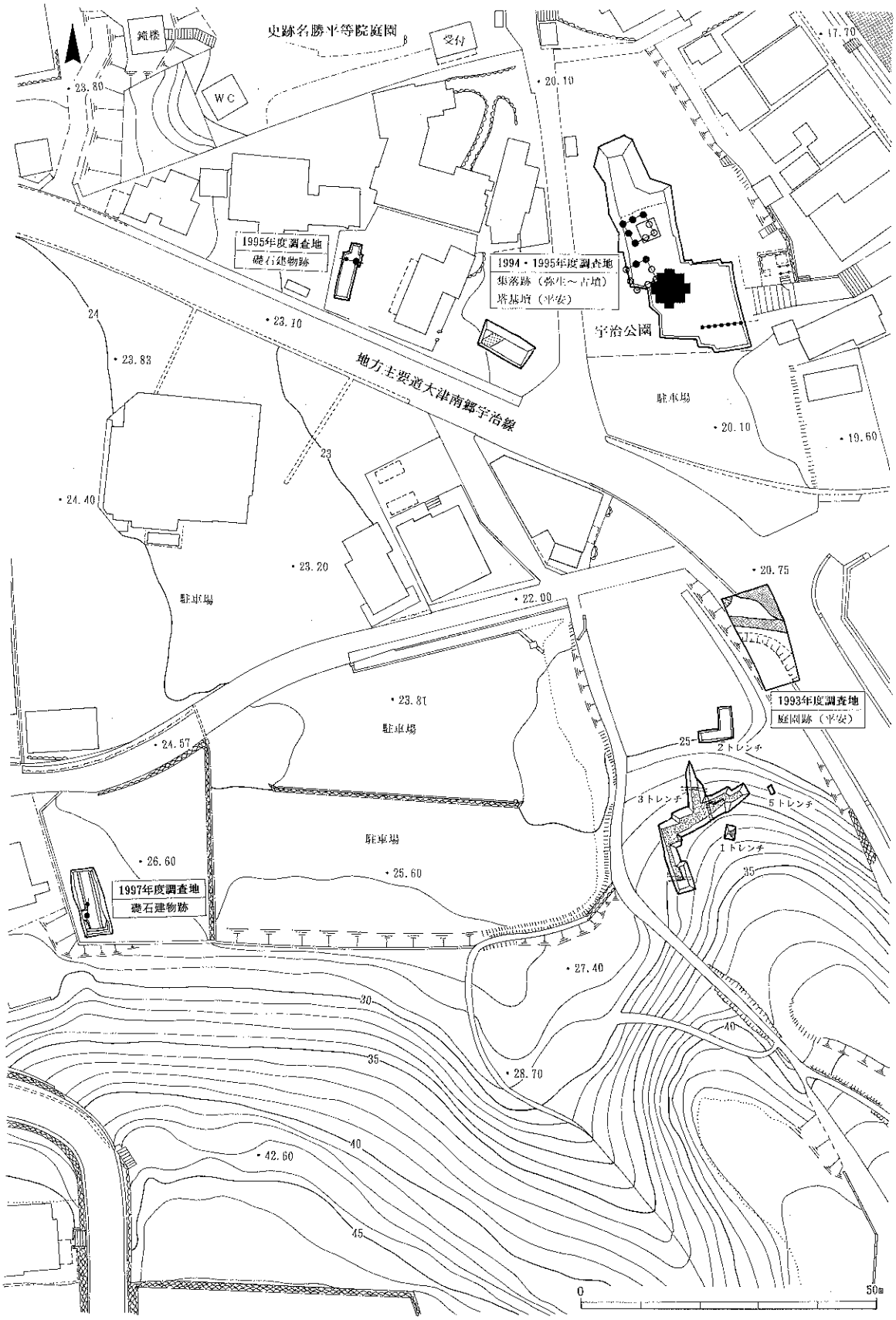
庭園の全容が明らかとなった頃から断面図・平面図・位置図等の図面作成及び写真撮影を行い記録を作成した。出土遺物については逐次記録をとって取り上げた。

下層遺構については、今年度も同様に平安期の遺構がほぼ全面にわたって良好に残存していたことからトレンチ北側の北岸断割での調査に止めたが、高杯・甕片を始めとして多くの古墳時代の遺物が出土し、昨年度同様に多くの遺物が埋まっていることが想定された。

発掘調査終盤に報道への発表を行い、10月24日(土)の午前に現地説明会を実施した。参加者は100名程であった。埋め戻しは掘削土砂で埋め戻し、11月10日に調査を完了した。調査面積は計150㎡となった。



第19図　調査地周辺地形図（1/5,000）



第20図　発掘調査地点図（1/1,000）

Ⅲ 検 出 遺 構

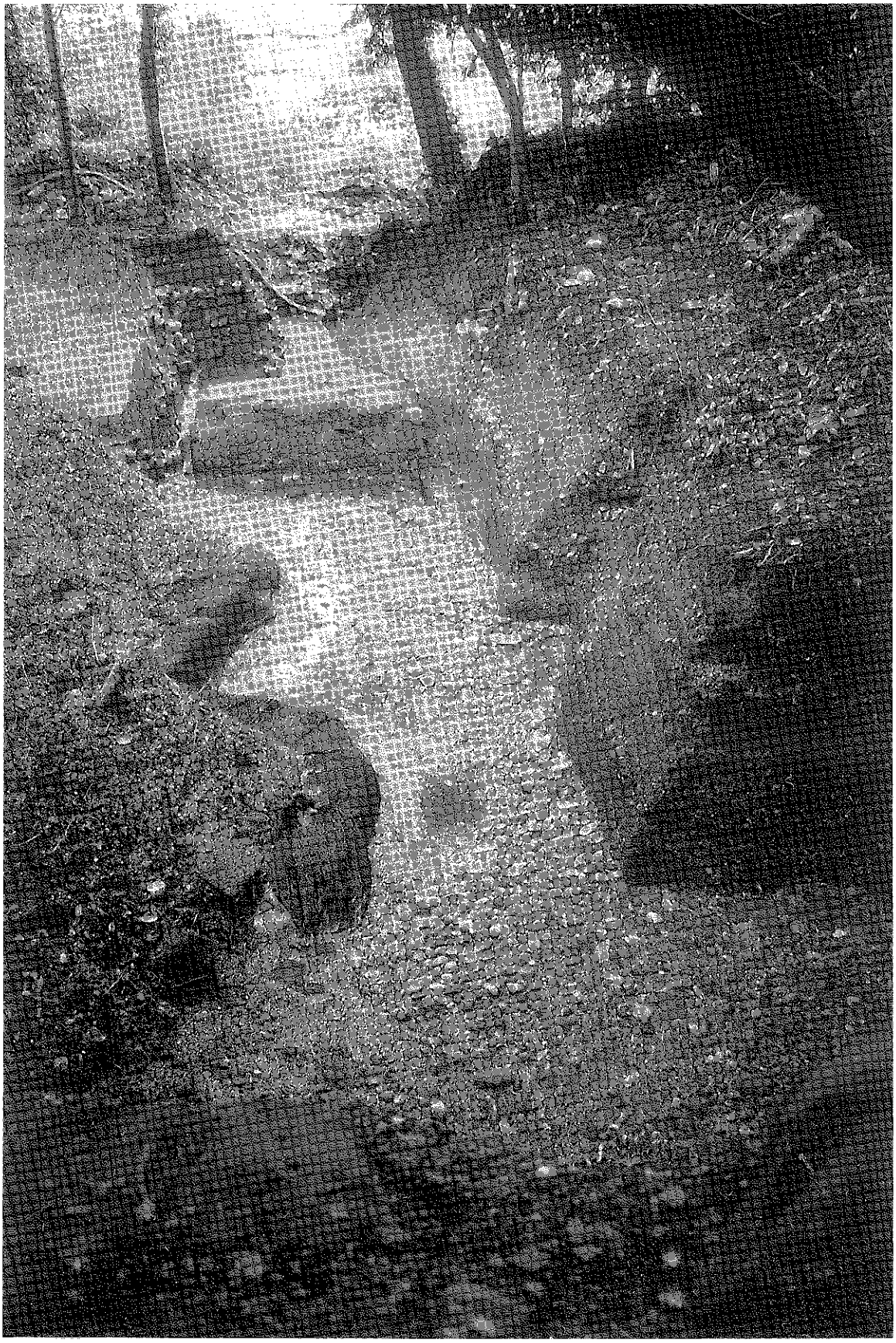
今年度の発掘調査は昨年度の調査で発見された庭園遺構の詳細を明らかにすることであった。トレンチを５カ所設定し調査した結果、その詳細は概ねではあるが明らかとなった。特筆される点は、園池のように水を溜める構造ではなく、自然の沢状地形をそのまま生かしながら水が流れる様を演出させた庭園であったことである。適当な名称がないので仮りに流れ遺構と呼んでおくこととする。この流れ遺構は、谷沢の一画を利用し作庭している。

以下、この流れ遺構の概要を３トレンチでの成果をもとに述べていくこととする。

土層の状況　トレンチ南壁面の土層の状況をみていく。地表面から0.7m程までが最近の置土（砂質土）であり、これらを除去すると褐色系の腐植堆積層があらわれた。この堆積層中には土器や瓦が含まれているのが確認された。堆積層は60～80cm程と厚く、この堆積層を除去すると平安期の流れ遺構が表れた。堆積層は、上層・中層・下層の３層に大きくわけることができた。いずれも堤がつくられ池状施設が形成されたその以降に堆積した層である。上層はその面的広がりが、近代まで残っていた池岸の木杭列と重なっており、その時の堆積層と考えられる。下層は堤が作られてからの堆積層である。中層は土層断面図から堤は後に盛土されて大きく嵩上げされたことが確認され、その改変後に堆積した層と理解された。流れ遺構として機能していた時の堆積層は西側の上流部でわずかに見られただけである。遺物は主に中層・下層から出土した。いずれもほぼ同時期の遺物であり、状況から上流からの混入の可能性も考えられ、各層位の時期決定は遺物からは判断しがたい。

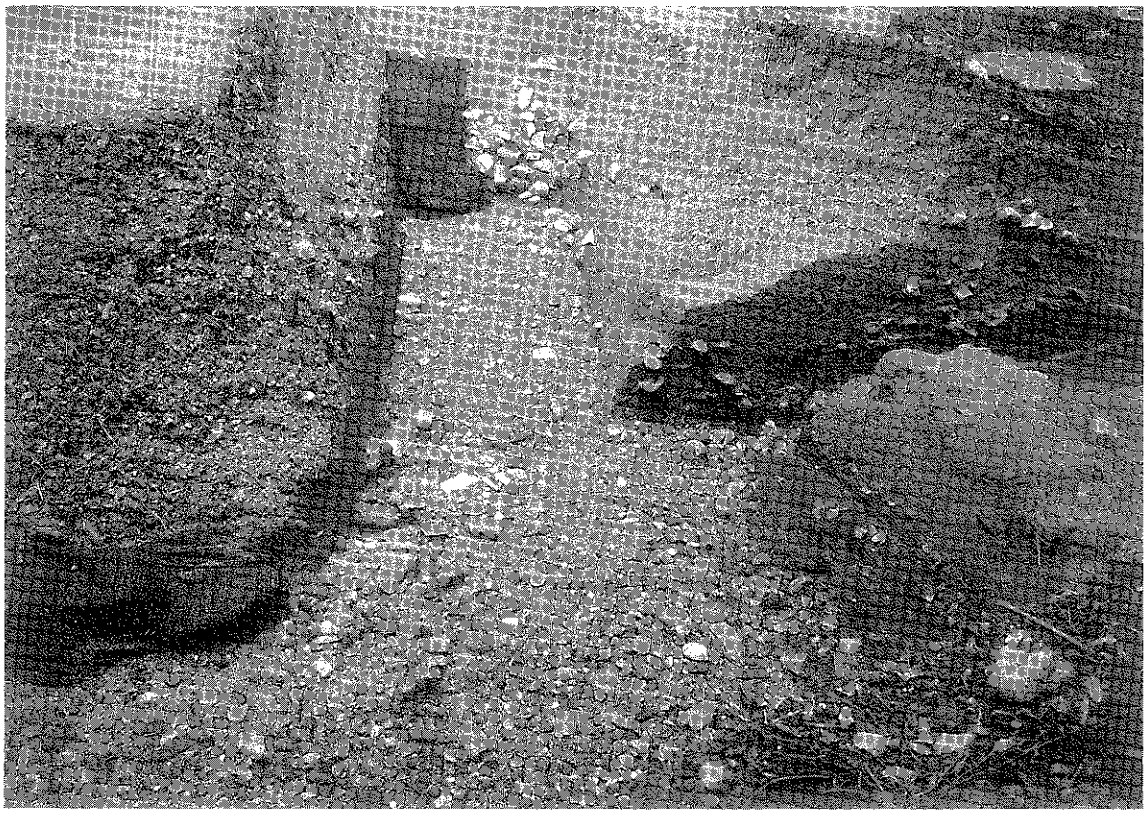
洲浜　南・北それぞれに拡張したトレンチ箇所から検出された。北側については昨年度の調査で明らかとなっており、今回も概ねその延長線上で検出された。洲浜に使用された石の大きさにはばらつきがあり均質感は認められない。洲浜は、まず傾斜面に褐色系の土をのせ、その上に石をあしらい作られていた。洲浜の傾斜角は25.5度で、他遺跡の洲浜のありかたと比較すると極めて急な傾斜である。南側は今回の調査で初めて明らかとなった。南側は今年の長雨によって度々トレンチ壁面が崩壊し、このため詳細な状況は不明だが、斜面上方に石がわずかながらみられたため南側の汀も洲浜を形成していたものと考えた。南側洲浜の傾斜角は15度であり、北側よりは緩やかであるが他遺跡と比較すると急傾斜に位置付けられる。こうしたありかたは自然の谷地形をそのまま取り込んだことによるものと考えている。

底面　西から東の宇治川に向かって全体的に緩やかな傾斜面となっている。トレンチ下場での東西間の距離は15m程である。標高はトレンチ西端で24m、東端で23mを測り、すなわち15mで１m程傾斜していることとなる。底面には礫がびっしり詰っていた。昨年度の調査

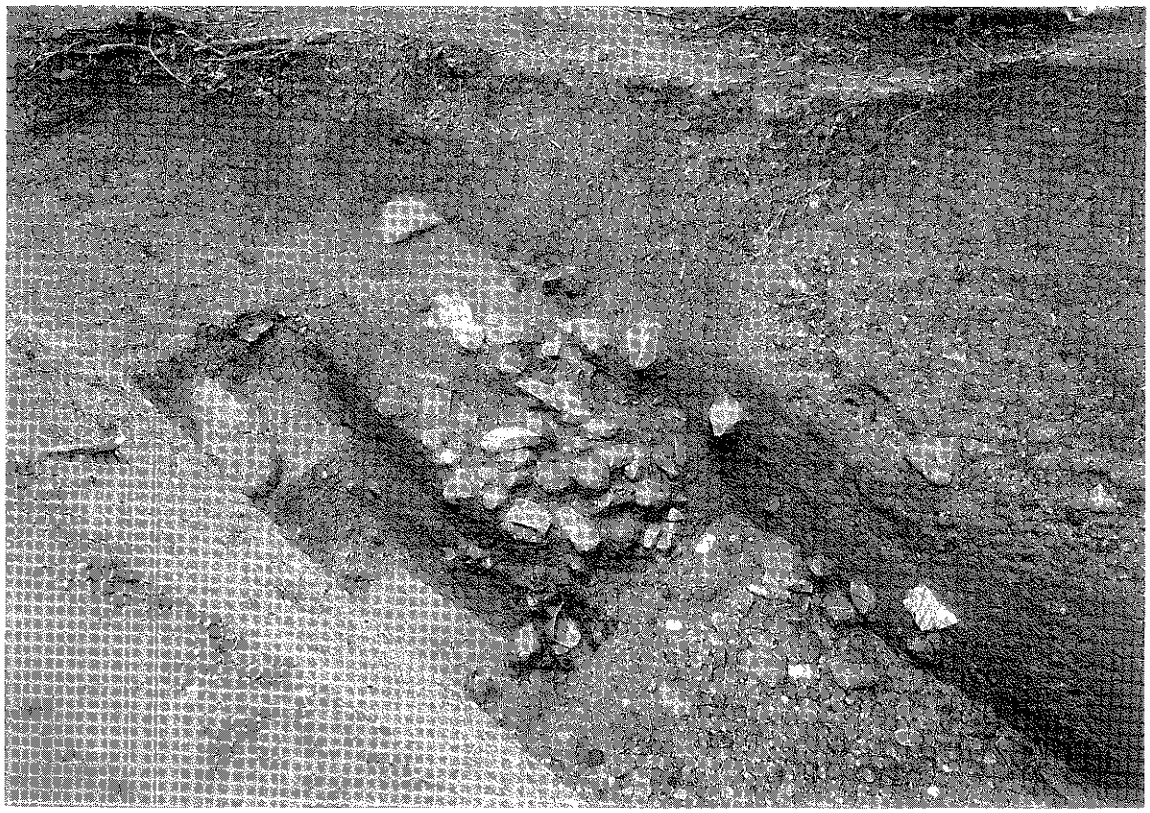


第21図　3トレンチ全景（西から）

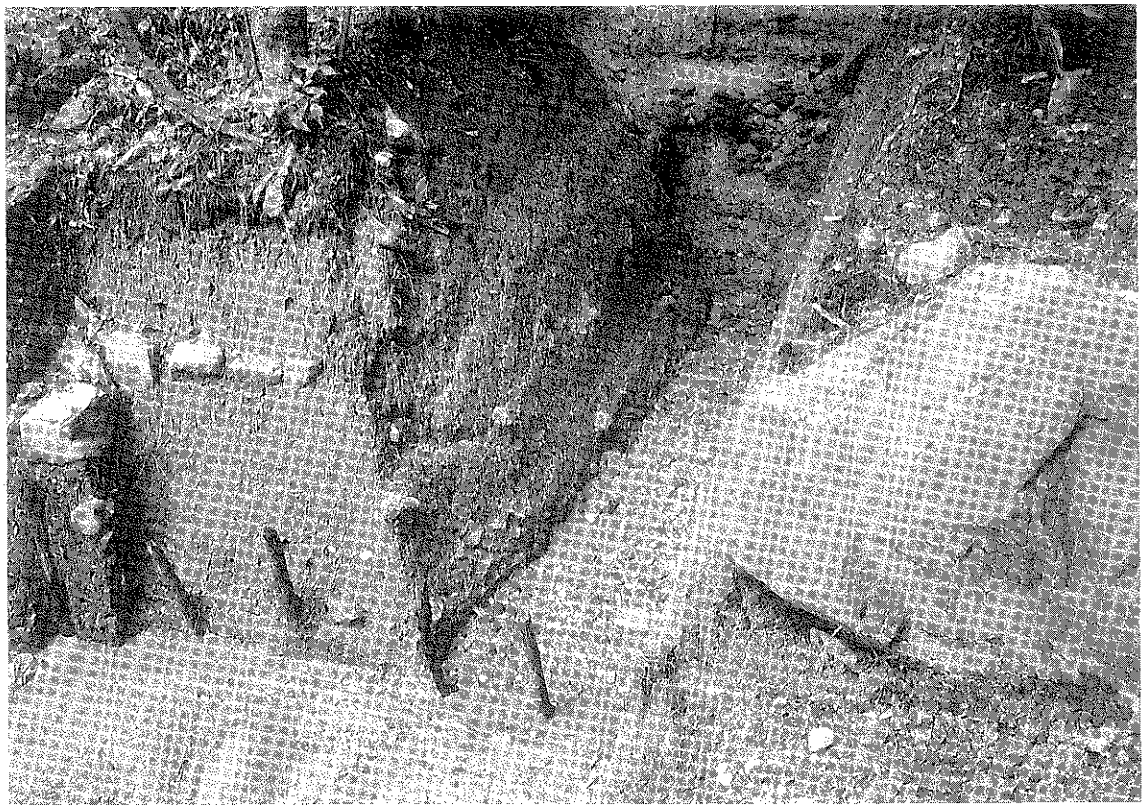
第22図　3トレンチ検出遺構平面図



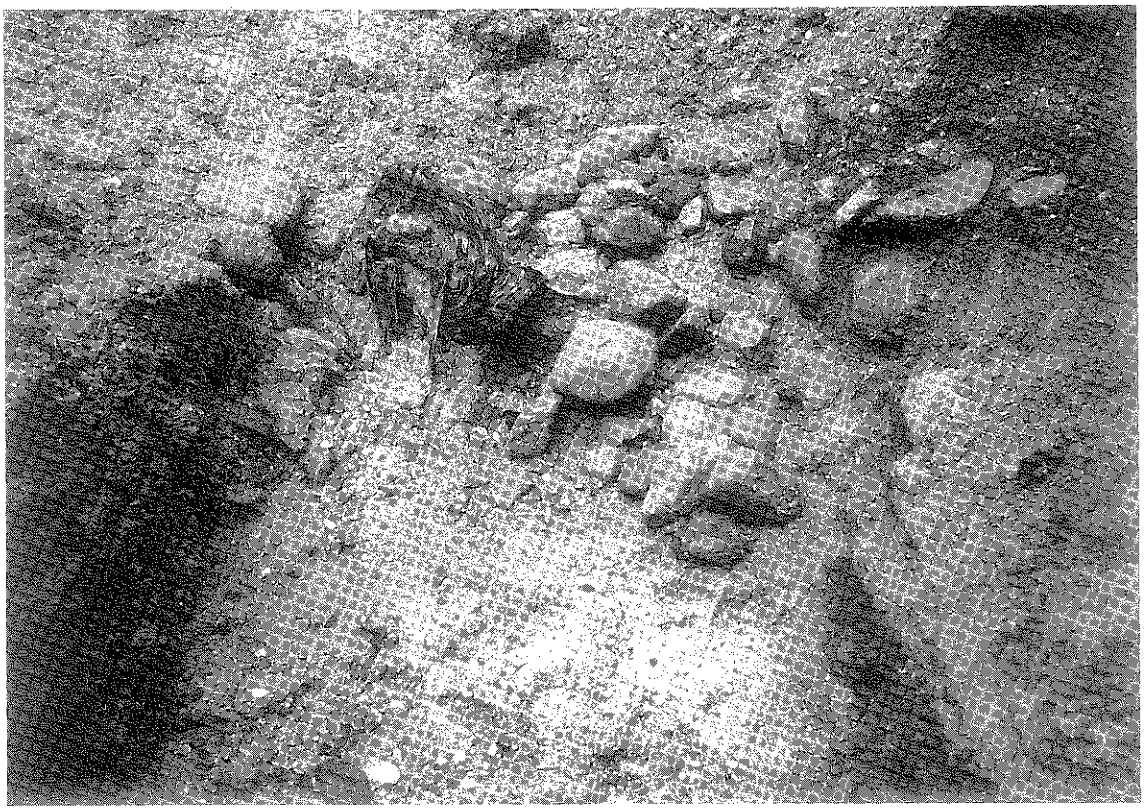
第23図　3トレンチ北拡張区全景（南から）



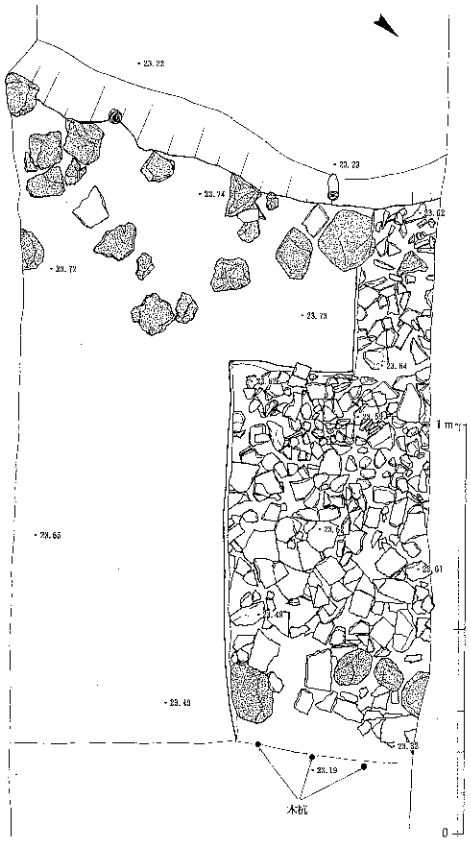
第24図　3トレンチ北拡張区検出の北側洲浜の状況（北西から）

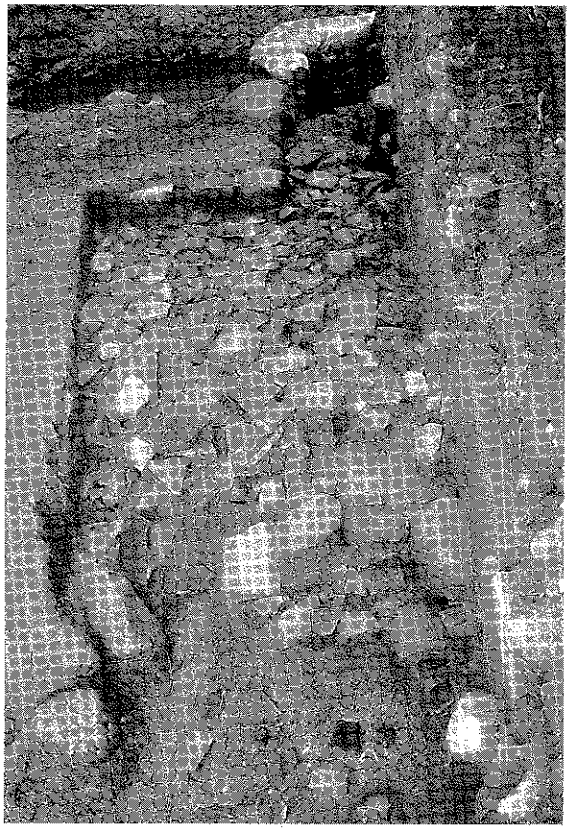


第25図　3トレンチ南拡張区全景（北から）



第26図　3トレンチ南拡張区検出の南側洲浜の状況（北西から）





第27図　堤平面実測図・堤盛土内の瓦敷層（東から）

で明らかなように、この礫面以外の上層・下層いずれにもこうした礫面を形成した層がみられないため、庭園に改変された際に人為的に配されたものと思われる。

杭列　底面には礫がぎっしり詰っていたが、その中に混って木杭が水の流れに逆らうように南北に並置しているのが２カ所で確認された。大半の木杭は、底面の礫の中に埋もれた状態で見つかっているため、未検出の木杭もありうる。直径７～10cm程の丸木杭が使用されている。底面からどの程度の長さまで本来でていたのかは不明だが、内１本だけは底面から20cm程突出していた。作庭当初からすでに存在したのかは明らかにできないが、底面が腐植堆積層で覆われる以前に穿たれていることは間違いない。

堤　トレンチの東側すなわち下流にあたる位置で検出された。この堤ができることによって池状に水が溜まる構造物に変化した。底面からは40cm程の高さをもつ。堤の盛土は大きく３層に分けられる。下層は遺物を含む褐色系の土で、その土質から底面上に堆積した腐植土を盛土に利用したものと思われる。中層は瓦片がほぼ全面に敷き詰められて層位をなしていた。上層は比較的しまった黄褐色系の土で盛られていた。堤の池側には木杭が数本、間隔をあけて穿たれていた。築堤時期は、下層から13世紀代のかわらけが出土しており、それ以降に形成されたものとしか明らかにしえない。

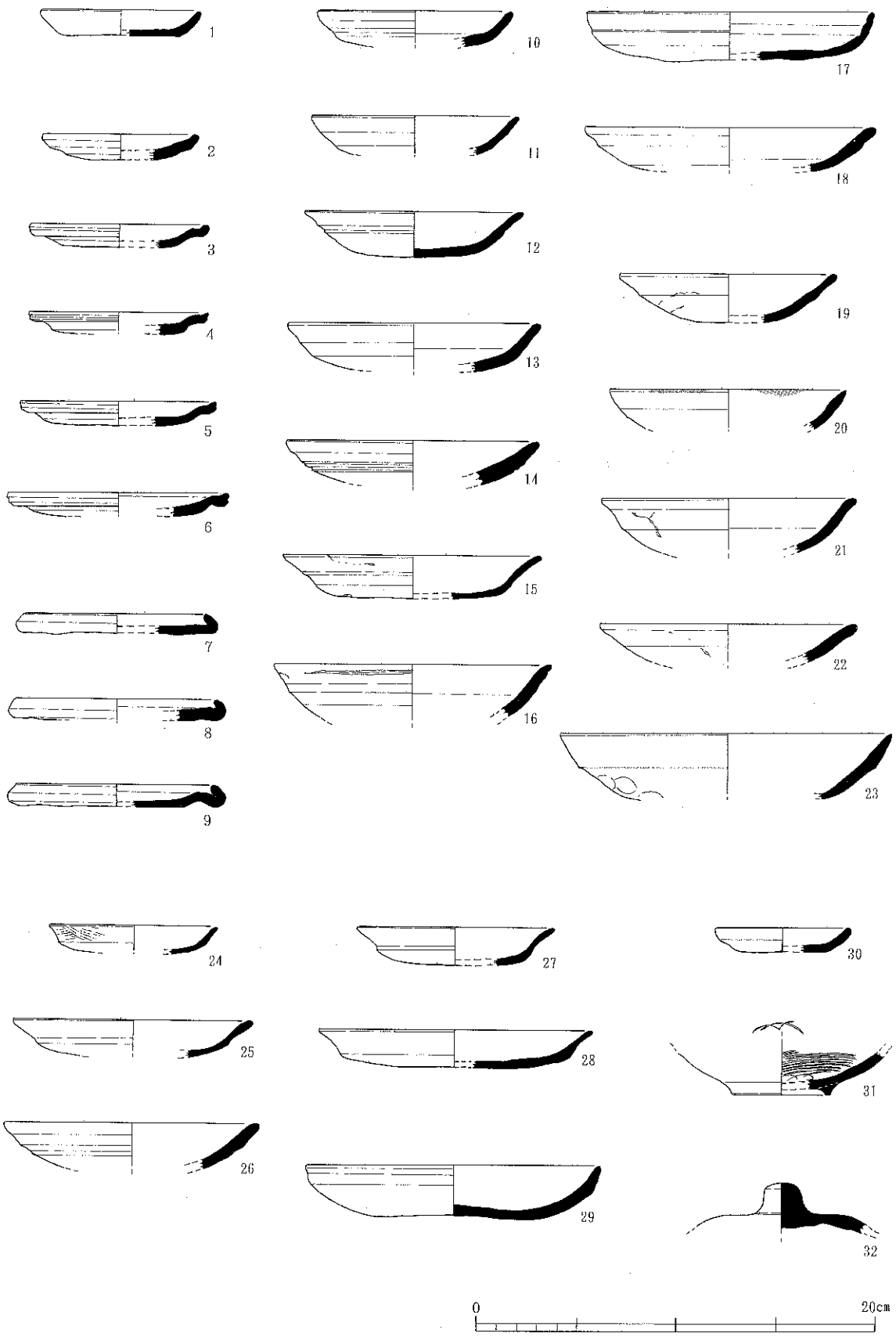
Ⅳ 出 土 遺 物

今回の調査では、コンテナにして約30箱程度の遺物が出土した。その大半は平安時代の遺物で、土器や木製品、瓦などが出土した。また少量ではあるが、古墳時代の遺物もみつかっている。ここでは、土器、瓦、木製品、古墳時代の遺物という順で、その概要を報告する。

A. 土器（第28図）

土師器皿、瓦器皿・椀、瓦質土器蓋が出土した。包含層での出土がほとんどであるためか、細片が非常に多く、全形を把握できるものはきわめて少ない。ここでは出土地点ごとにわけてみていきたい。

中層出土遺物（第28図１～23、30～32）　１は口径8.0㎝。平たい底部に直線的で低い体部をもつ。底部内面はごく弱いナデを施し、平滑に仕上げられている。これのみ形態的に特異な皿である。黒茶色で精良な胎土。このほかの皿はほとんどが淡茶褐色を呈し、胎土は微少な砂粒を含んでいる。２～６はいわゆる「て」字状口縁の皿。口径は8.0～11.0㎝と若干ばらつきがある。全体的に屈曲はあまく、器壁も４㎜前後と厚手である。京都周辺で流通する同形態の皿を、宇治近辺で模倣して生産したものと思われる。７～９はコースター状の受け皿。口径は10.0～11.0㎝。形態的に９はやや古相を示す。10～18は２段ナデを口縁部に施す皿。口径は11.0～15.0㎝の幅で、およそ３法量が確認できるが、相対的な出土量としては13.0㎝クラスのものがもっとも多い。底部内面は一方向ナデを施すものが主体であるが、15のみ器壁に沿って斜めに４箇所ナデを施したのち、十字方向にナデるという方法で底部内面を調整している。16は口縁部外面に深さ0.5㎜程度の細い凹線がはしる。粘土の接合痕か。17は口径14.6㎝、器高2.4㎝。口縁端部は直立気味にたちあがる。底部内面を一方向ナデしたのち、体部内外を２度にわけてナデ調整をおこなっている。体部内面にはそのときの痕跡が微細な凹凸としてのこっている。全体的に丁寧に仕上げられており、京都からの搬入品の可能性もある。19～23は、口縁部外面に１段ナデを施す皿。口径は12.0㎝前後のもの（19～22）と17.0㎝のもの（23）のおおむね２法量がある。内面の調整は全体的に不明瞭である。19は比較的丸底の皿。体部外面に接合痕が２条、平行して残っている。幅0.6㎝程度の粘土帯を巻き上げて成形したものと考えられる。20は口縁部にタール状の物質が付着している。灯明皿に使用されたものであろう。21は体部外面にＹ字状の接合痕をのこす。このようなかたちの接合痕はめずらしい。23は体部下半にユビオサエの痕跡を明瞭にのこす。これら１段ナデの資料は、接合痕をのこすもの（19・21・22）がめだっている点など、10～16のような２段ナデの資料とは異なる点が多い。両者の相違を時期差と考える余地もあるが、ここでは



第28図　出土土器実測図（1/3）

さしあたり生産集団（地）の相違としてとらえておきたい。

このほか、瓦器や瓦質土器も少量出土している（30～32）。30は瓦器の皿。口径7.0㎝と、かなり小さいサイズのものである。内面に同心円状の暗文を施す。31は瓦器椀。底径5.0㎝をはかる。細片のため判断は難しいが、大和型第Ⅱ段階Ｂ型式の資料であろうか。32は瓦質土器の蓋。径2.0㎝程度のわりあい大きなつまみをもつ。黒灰色で精良な胎土である。

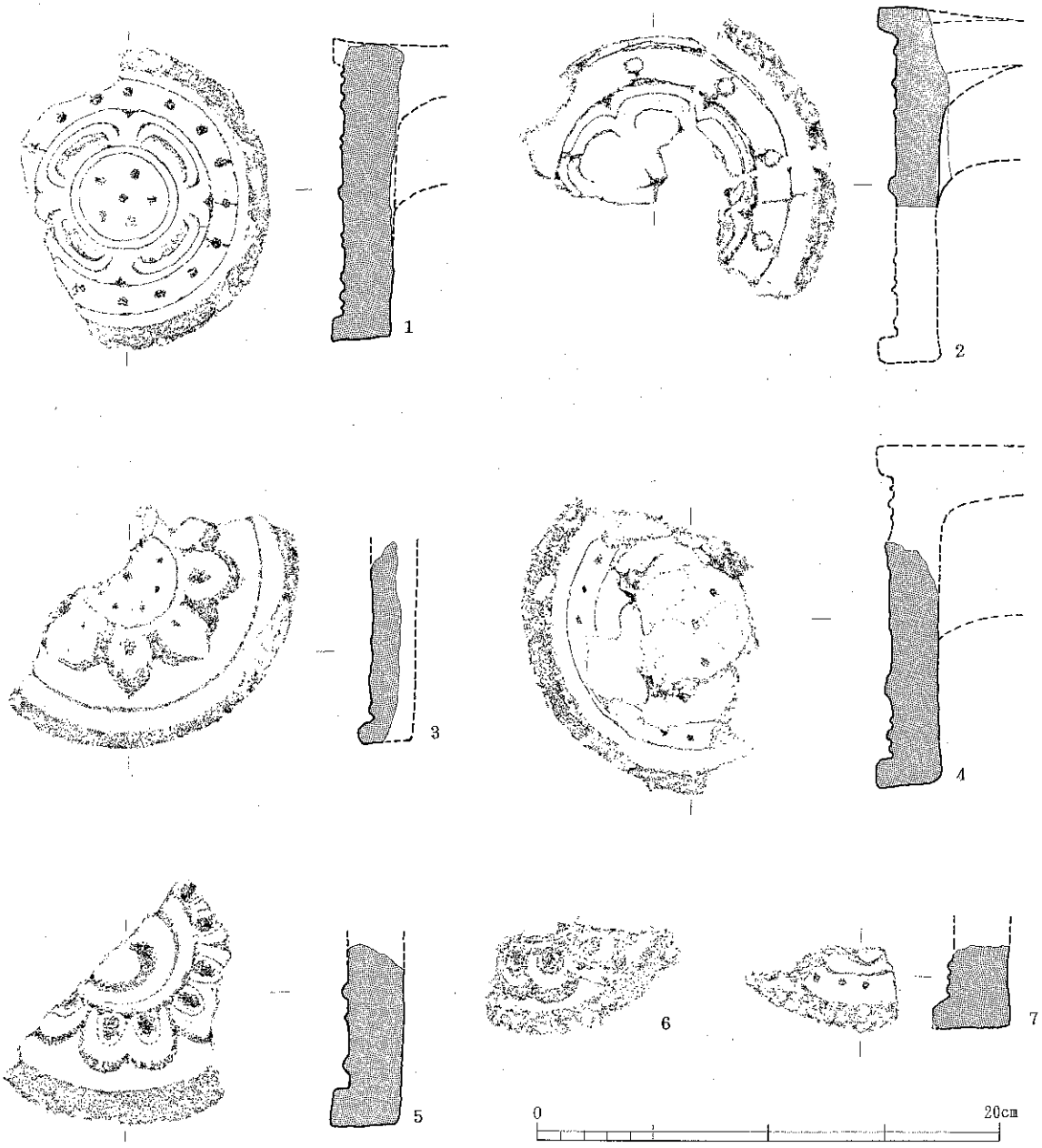
これら資料群は、京都周辺で流通している土師器皿とは製作技法の微細な点や、胎土の質などから異なるものと判断できる。そのため、京都の土師器皿編年に厳密に対比させて年代をわりだすことには若干の問題をのこすが、京都産からの搬入品である可能性がもっとも高い17から判断するかぎりでは、12世紀中頃を中心とした年代が考えられる。これは先述の瓦器椀（31）から想定される年代とも矛盾しない。

下層出土遺物（第28図24～26）　池堆積土の下層からは土師器皿が出土している。淡茶褐色で、砂粒や赤色の微粒子を含む胎土。中層出土の土師器皿とちがいはみられない。24は口径8.4㎝。外反する体部をもち、口縁部外面は幅広にナデ調整が施される。ナデの切り合いが明瞭にのこっており、時計回りにナデ調整が施されたことがわかる。25は口径12.0㎝の皿。強いナデが施されており、口縁部外面にはナデの境目が段をなしている。口縁端部はやや丸みをもちながら肥厚する。26は口径12.8㎝。これのみ口縁部外面には２段ナデが施されている。調整は全体的に弱めで、器壁は６㎜前後とかなり厚い。24や25のように形態的に異なるものがみられるものの、胎土の質や調整技法の点では中層出土遺物と明確なちがいはみられない。中層と下層では大きな時期差はないものと考えておく。

堤盛土内出土遺物（第28図27・28）　池の改修で造られた堤の盛土内で出土した遺物である。27は口径10.0㎝。強い１段ナデが施されており、口縁部は強く外反する。淡茶褐色で、砂粒を少量含む胎土である。28は口径13.8㎝。こちらも27とほぼ同じプロポーションをもつ皿である。色調や胎土も共通する。これらは、下層出土の24や25と形態的に類似する点もあるが、年代を決定する確実な根拠には乏しい。13～14世紀代のものか。

池底礫敷直上出土遺物（第28図29）　池底の礫敷に張り付くような状況で、ほぼ完形の土師器皿が１点出土した。29は口径14.8㎝、器高2.8㎝の皿。淡茶褐色で精良な胎土である。底部内面を一方向ナデののち、体部内面から口縁部外面上半にかけての範囲をナデる。口縁部には２段ナデが施されている。ナデの部分には凹凸や細かい条線がみられ、工具のようなものでナデられたことが想定できる。口縁部は直立気味にたちあがる。口縁部の形態や調整は、中層出土の17に非常に近い。12世紀中頃の資料と考えて大過ないものと思われる。

以上、今回の調査で出土した土器群は、層位ごとに明瞭な時期差は認められず、大半は12世紀前半～中頃を中心とした時期におさまるものと考えられるだろう。



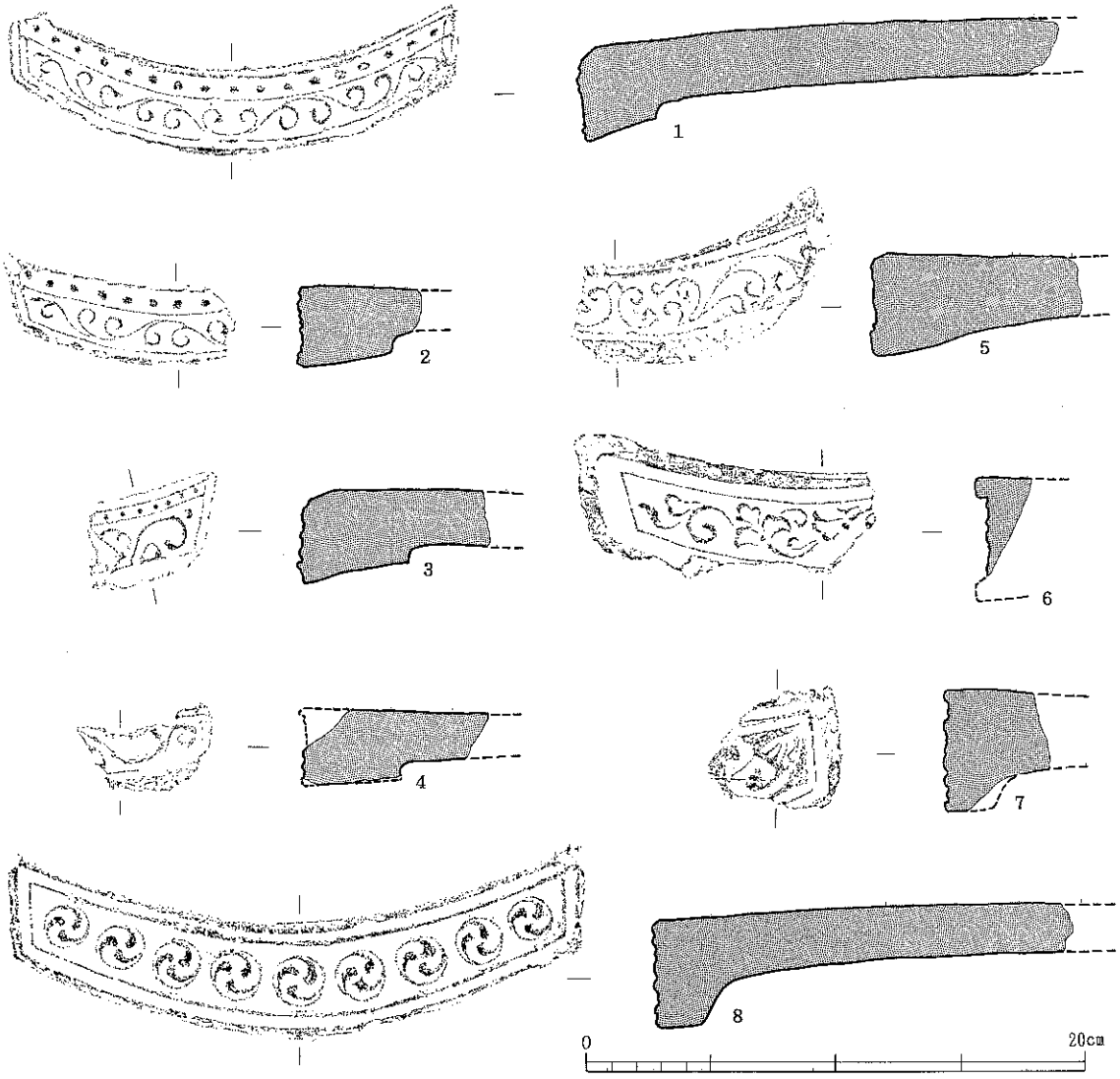
第29図　軒丸瓦実測図（1/3）

B．瓦（第29～31図）

種類として、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦がある。軒平瓦６以外はすべて流れ遺構上に堆積した腐植土層からの出土である。平瓦・丸瓦については未整理であるため、その他資料の概要を説明する。

軒丸瓦（第29図）　今回の調査では７種類８点が出土した。昨年度出土した２点を含めると８種類10点になる。時代的には平安中期から後期までである。

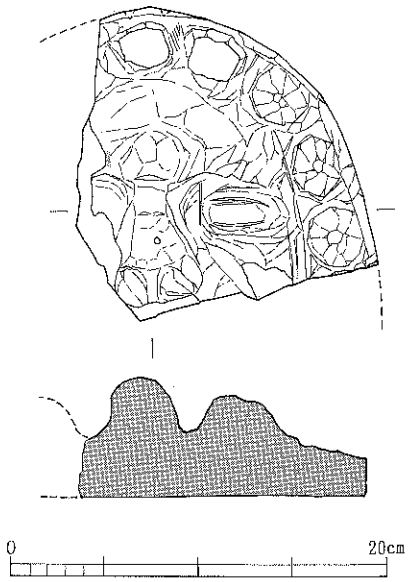
１は単弁４弁蓮華文を主文とし、外区内縁に珠文16個を配する。中房に１＋５の蓮子を配



第30図　軒平瓦実測図（1/3）

する。瓦当直径13cmである。2は単弁5弁蓮華文を主文とするものである。瓦当中心に十字形を配置し、外区内縁に大振りの珠文を配する。珠文数は推定8個。瓦当直径推定15cm。薬師寺[1]に同笵品あり。3は4葉宝相華文を主文とするもので、中房に1＋8の小粒の蓮子を配する。瓦当直径推定14.6cm。薬師寺・唐招提寺出土品[1]と同笵であろう。4は4葉宝相華文を主文とし、外区内縁に小粒の珠文を配するものである。5は複弁六弁蓮華文を主文とし、中房に右巻き二巴文を配するものである。子葉周囲に圏線をもつ。平安後期河内系。6は、複弁六弁蓮華文を主文とするものである。子葉周囲に圏線を有する。平安後期河内系。5・6いずれも平等院に同笵品[2]あり。7は断片であり詳細は不明である。外区内縁は1条の圏線で画され、その内縁には小さな珠文を配している。

軒平瓦（第30図）　今回の調査では7種類8点が出土している。時代的には平安中期から後期のものである。



第31図　鬼瓦実測図（1/4）

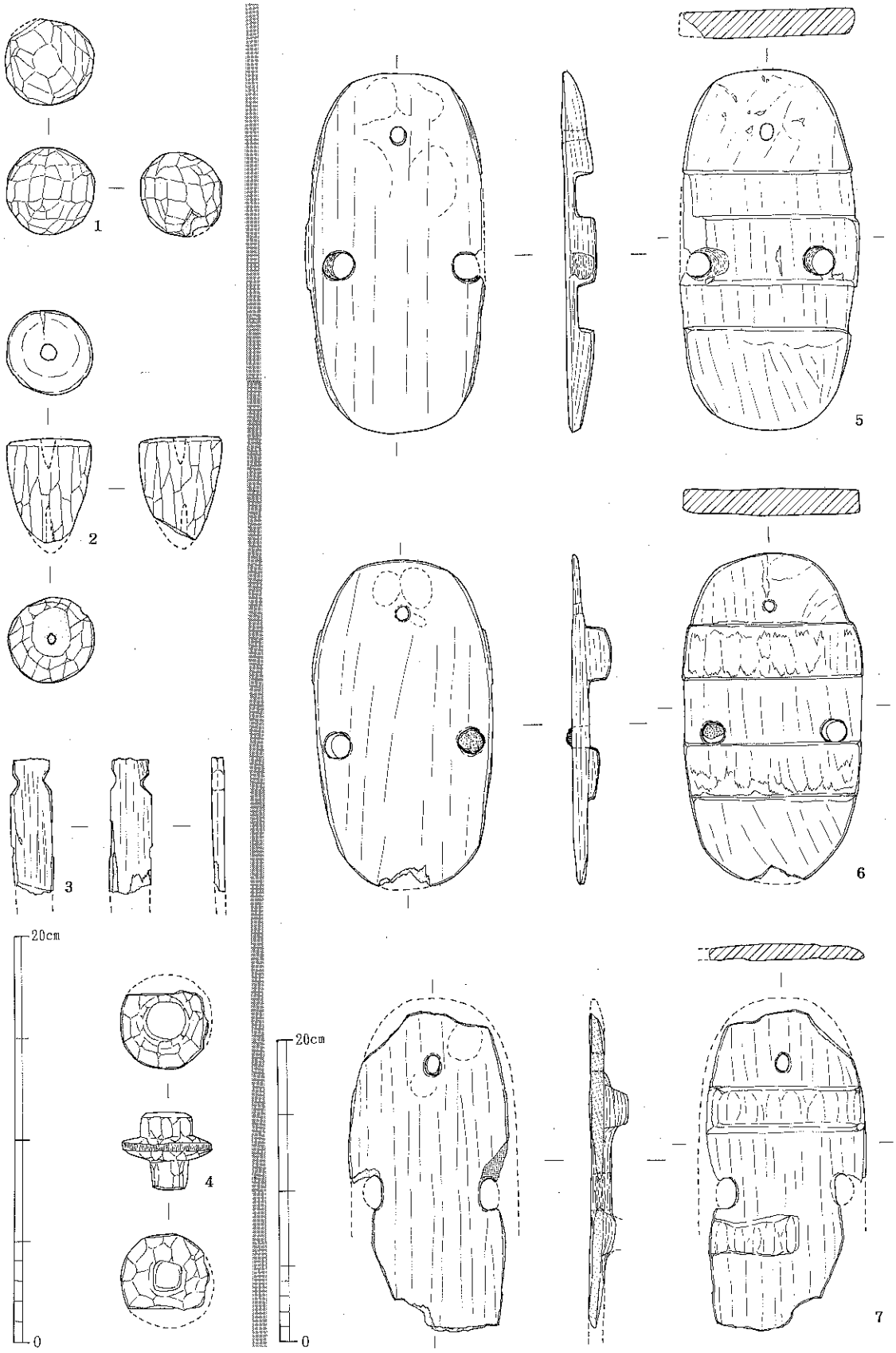
1・2は素文縁で均整唐草文を主文とする。主文上側に18個の珠文が入り外区内縁を形成する。小型瓦。平等院・薬師寺出土例[3]と同笵であろう。3も1・2と同じ文様構成をとる小型瓦である。4は素文縁で均整唐草文を主文とするものである。小型瓦。5は素文縁の均整唐草文を主文とする。中心飾りがC字背向でその上方を山形文で結ぶ。曲線顎。須恵質。6は宝相華唐草文を主文とするものである。表土層からの出土である。7は断片のため詳細不明だが陰刻の唐草文が展開しているようにみえる。8は連巴文軒平瓦である。左巻き3巴文を9個配して主文を構成する。製作技法は河内系軒平瓦と酷似。

鬼瓦（第31図）　型づくりではなく、ヘラ状工具によって削り出して整形した鬼瓦である。ヘラケズリは極めて粗い。背面は縁に近いところはヘラケズリによって丁寧に仕上げられるも、その他の部分は未調整でほぼ全体に布目痕がみられる。この鬼の顔の特徴をあげるとすれば目が細長く表現されていることで、通常みられる鬼瓦の丸く大きな目とは異なっている。

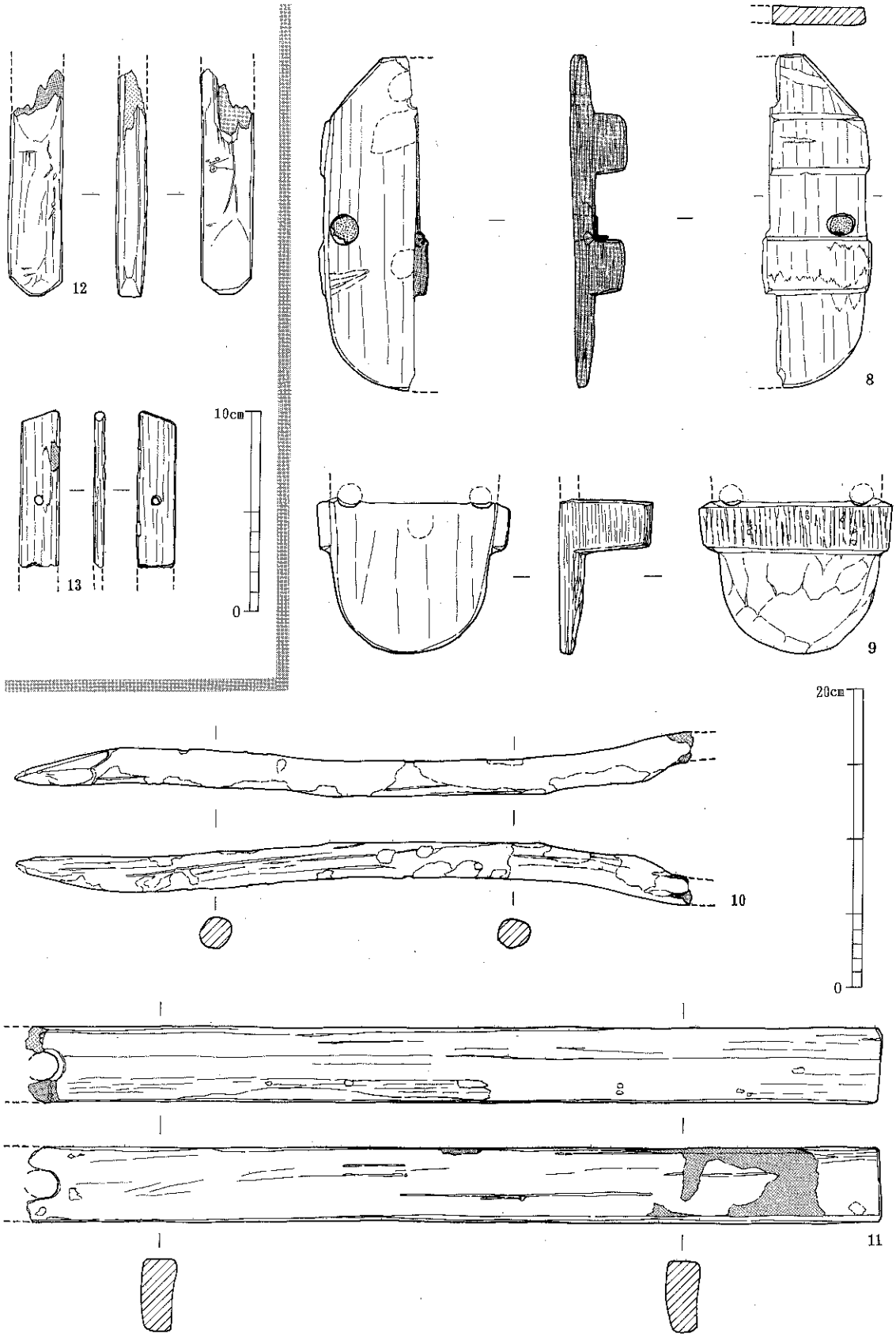
C．木製品（第32・33図）

木製品は水分を多く含んだ腐植土層から出土しており、その残存状況は極めて良い。ここに図化した以外にも加工痕のある木製品が多数みられたが、小破片が多く全体の形状もほとんど明らかにできないため今回図化はしていない。

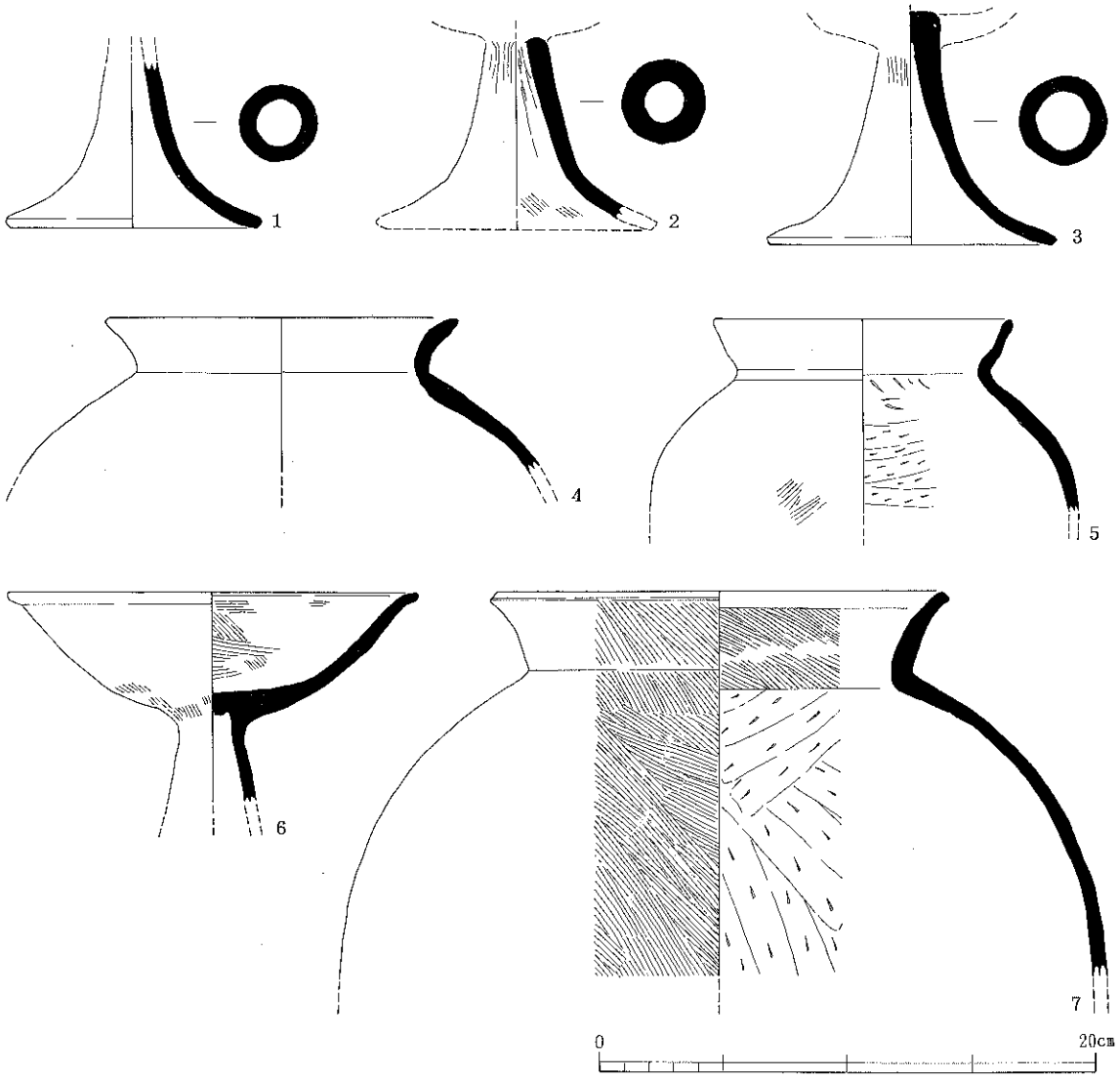
1は木球である。ほぼ円形で直径5㎝程を測る。加工痕から、木球の整形過程が良くわかる。昨年度調査では4点出土しており計5点となった。2は独楽である。体部は粗く面取り・加工される。上端は平坦で中央に深さ2㎝程の抉りがある。下端には非常に細長い針穴があり、針は鉄針状のものが想定される。3は荷札状木簡である。文字の判読ができないため、荷札木簡と断定しがたい。下端には意識的に切断した痕跡がみられる。4は両端に大きさの異なるほぞが付設するもので、用途は不明。5～9は下駄である。6～9は連歯下駄である。5は陰刻の差歯下駄である。材質、穴の位置・大きさ、形状は7だけが異なる。6～8は歯がかなり摩滅しており長期間の使用が認められる。8は歯の残りが最も良く高さがあり、高下駄であろうか。下駄は昨年度調査でも1点出土しており計6点となった。10は、直径3㎝程の細長い未加工の丸木で一方の先端を削り尖らせたものである。11は細長く長方形状に板状加工したものである。欠損箇所に直径2㎝程に穿たれた穴がある。12は幅3㎝、厚さ2㎝程の細長い木製品で、一方の端部を丸くおさめたものである。13も幅2㎝、厚さ0.8㎝程の木製品で一方の端部を斜め方向にカットしている。釘穴状の小穴が1カ所ある。



第32図　木製品実測図(1)（左 1/3、右 1/4）



第33図　木製品実測図(2)（左 1/3、右 1/4）



第34図　前代遺物実測図（1/3）

D．前代遺物（第34図）

塔の川遺跡（平等院下層遺跡）に伴う遺物が、コンテナで２箱分出土した。出土品はすべて土師器で、ここでは図化できたものについて記述する。

１～３・６は高杯。６は径16.8cmを測る。杯部は口縁部が直線的におさまるものと端部が外反するもの（６）がみられる。６は内外面にハケが施される。脚部は軸部上半が中実のもの（１～３）と中空のもの（６）がみられる。外面はハケの後縦方向のナデにより仕上げるもの（２・３）が多い。２は軸部内面に横方向のヘラケズリを施す。４・５・７は甕。４は口縁部が短く外反する。同一個体とみられる破片から、やや長い球状の胴部を持つと思われる。５は内方に屈曲し立ち上がる口縁部をもつ。体部内面にヘラケズリ、外面にハケの横ナデが施される。７はやや外反する口縁部をもつ。口縁部及び体部外面にハケ、体部内面にヘラケズリを施す。以上の土器は５～６世紀にかけてのものと思われる。

V　ま　と　め

以上、簡略ながら発掘調査成果の概要を述べてきた。当初の調査目標である庭園跡の実体解明はいまだ不十分であるが、調査の可能な範囲の中では十分な成果を挙げたと思っている。昨年度調査ではあまり出土しなかった遺物、特に軒瓦が数多く出土したことはこの庭園をもつ施設やその時期等を考える上で極めて重要な成果であったと考えられる。ここでは極く簡単に成果のまとめを行いたい。

庭園の特徴　今回検出の庭園は、園池のように水を溜める施設ではなく、自然の沢地形をそのまま生かすことを基本に作庭を行われていたと考えられる。沢に水がせせらぎ状に流れる様をそこに演出させた庭園であったようだ。このコンセプトは『作庭記』の記述にも見事に一致する。そしてこうした庭が演出できた背景には水量が豊富でなければならず、かっては水量が豊富にあったことが想起される。後述する『南泉房』名の由来もこうしたところに求められるのであろうか。

作庭時期　時期の特定は難しいが、出土瓦は11世紀後半からみられ、これらがこの庭園を有した施設の屋根に葺かれていたものと想定し、現時点では11世紀後半頃に作庭されたものと考えておきたい。

南泉房庭園？　『宇治拾遺物語』序文によれば平等院の南山裾には南泉房という房があった。そして源隆国（1004～1077）が晩年すなわち11世紀後半にこの南泉房に寄宿し説話集を書き綴ったとされる。瓦の年代・位置等からみて、今回検出の庭園はこの南泉房の庭園であった可能性を指摘しておきたい。

平等院の伽藍想定復元　今回の発見で平等院鳳凰堂の南側の伽藍配置が現在の地図上にかなり具体的な形となっておとすことができるようになった。特に平等院の中で鳳凰堂とともに重要な位置を占める一切経蔵（宝蔵）の位置が概ね想定できるようになったのは大きな成果と思われる。またこれまで大津南郷宇治線をメルクマールに平等院の南限としていたが、この発掘によって南限は山裾まで広がり、境内範囲が想定以上の広がりをもっていたと考えられるようになった。

（註）

1）奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』 1997

2）平等院にて実見

3）奈良国立文化財研究所「薬師寺宝積院の調査」『1991年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 1992

抄　　録

ふ り が な	うじしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう
書　　名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
副 書 名	白川金色院跡・平等院旧境内遺跡
巻　　次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	第 43 集
編 集 者 名	浜中 邦弘 ・ 中井 淳史 ・ 斉藤 眞吾
編 集 機 関	宇治市教育委員会
所　在　地	〒611－8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地
発行年月日	西暦 1999年 3 月31日

所収遺跡名	所　在　地	市町村コード	遺跡番号	北 緯	東 経	期 間	面 積	原 因
白川金色院跡	宇治市白川姿婆山・宮の前・宮の後・植田	26204	10	34° 52′ 28″	135° 48′ 55″	981109 ～ 990319	250㎡	範囲確認
平等院旧境内遺跡	宇治市宇治塔の川	26204	80	34° 53′ 42″	135° 48′ 42″	980820 ～ 981110	150㎡	宅地開発

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
白川金色院跡	寺　院	平安時代 ～ 江戸時代	礎石建物 閼伽井跡 掘立柱建物	陶磁器・土器・瓦・漆器	
平等院旧境内遺跡	寺　院	平安時代	庭　園　跡	土器・瓦・木製品	

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
－ 第43集 －

発行日　平成11年３月31日
発行者　宇治市教育委員会
〒611-8501 宇治市宇治琵琶33番地
(0774) 22-3141 (代)
印　刷　有限会社　新進堂印刷所

表紙写真
第９回 宇治市観光写真コンクール入賞作品
東 岡　国 晴 氏 撮影 「宇治川の朝」